第３章　史跡洲本城跡の概要

１. 指定状況

（１）指定状況

名称：洲本城跡

所在地：兵庫県洲本市小路谷古城 1077-1、1077-4、1078-1、1079-1、1080-1、1081-1、1082-1、1084-1、1084-2、1107-1、1107-2、1107-3、1107-6、小路谷古城御熊山 1272-1、1272-2

指定日：平成 11 年（1999）1 月 14 日

指定理由：

洲本城跡は、淡路島の南東、洲本市街地の南側にそびえる標高約 130ｍの三熊山に所在する。戦国時代から江戸時代にかけて淡路国統治の中心となった山城である。東西約 800ｍの範囲に総石垣の曲輪が展開する。大手門を南側に開き、北奥の最高所に天守を配して紀淡海峡を見下ろし、遥か彼方に大阪・堺の市街地を遠望する。

天守の南下に本丸、続いて南側に南の丸、東側に東の丸・用水池・武者溜を、西側に籾蔵、西の丸を配し、北側の急斜面には 2 本の登り石垣と北側斜面を守る小規模な郭群、10 数本の大規模な竪堀を設けている。各曲輪の石垣は、ほとんどは野面積みであるが、隅石垣等の一部には打ち込みはぎの算木積み技法が用いられている。石材は三熊山産の和泉層群砂岩及び礫岩である。

洲本城は、戦国時代前期に紀伊の水軍勢力の安宅氏によって築城されたと伝えられており、江戸時代の地誌「淡路四草」（『淡路常磐草』『淡路草』『堅磐草』『味地草』）は、永正 7 年（1510）の安宅河内守冬一、大永 6 年（1526）の安宅隠岐守治興による築城の両説を載せている。天正 10 年（1582）には、織田系大名の仙石氏が短期間この城に拠ったが、同 13 年（1585）から慶長 14 年（1609）までの 24 年間は、豊臣系大名の脇坂安治が在城して紀淡海峡・大阪湾を守備した。脇坂氏が伊予国大洲に移封された後には藤堂高虎、池田輝政・忠雄が淡路を領したが、この時期の城史はあまり明瞭ではない。元和元年（1615）大坂夏の陣で豊臣秀頼が滅亡すると、淡路一国は阿波徳島藩・蜂須賀家に加増された。寛永 8 年（1631）から同 12 年（1635）の「由良引け」によって、再び洲本城に政治の拠点が移り、以後明治維新まで洲本城が淡路統治の機能を担い続けた。本丸跡及び東の丸跡を中心に、織豊期の瓦や磚が出土しており、中には脇坂氏の家紋である「輪違い紋（わちがいもん）」瓦や朝鮮系の滴水瓦（てきすいかわら）等も含まれている。

方形プランの本丸、平虎口、内枡形、折れを多用した石垣、用水池等の現存する城郭施設は、脇坂段階のものを寛永期以降に一部改修したものと考えられるが、各遺構は長い歴史過程を反映して、築造・改修の時期が複雑に入り交っている。遺構の詳細な分類と変遷の解明は今後の研究課題であるが、竪堀群は安宅氏・戦国期段階、倭城との関係が想定される登り石垣（竪石垣）は、文禄・慶長期の所産と推定されている。

洲本城跡は、戦国時代から幕末まで、淡路一国の統治の拠点となった城郭で、海に臨む水軍の拠点城郭としても貴重な遺跡である。遺構の遺存状況も極めて良好であり、戦国期、文禄・慶長期、寛永期等の各時期の築城技術が層を成すように累積されている。よって史跡に指定し、保存と活用を図ろうとするものである。

図 3-1 史跡指定範囲（航空写真）

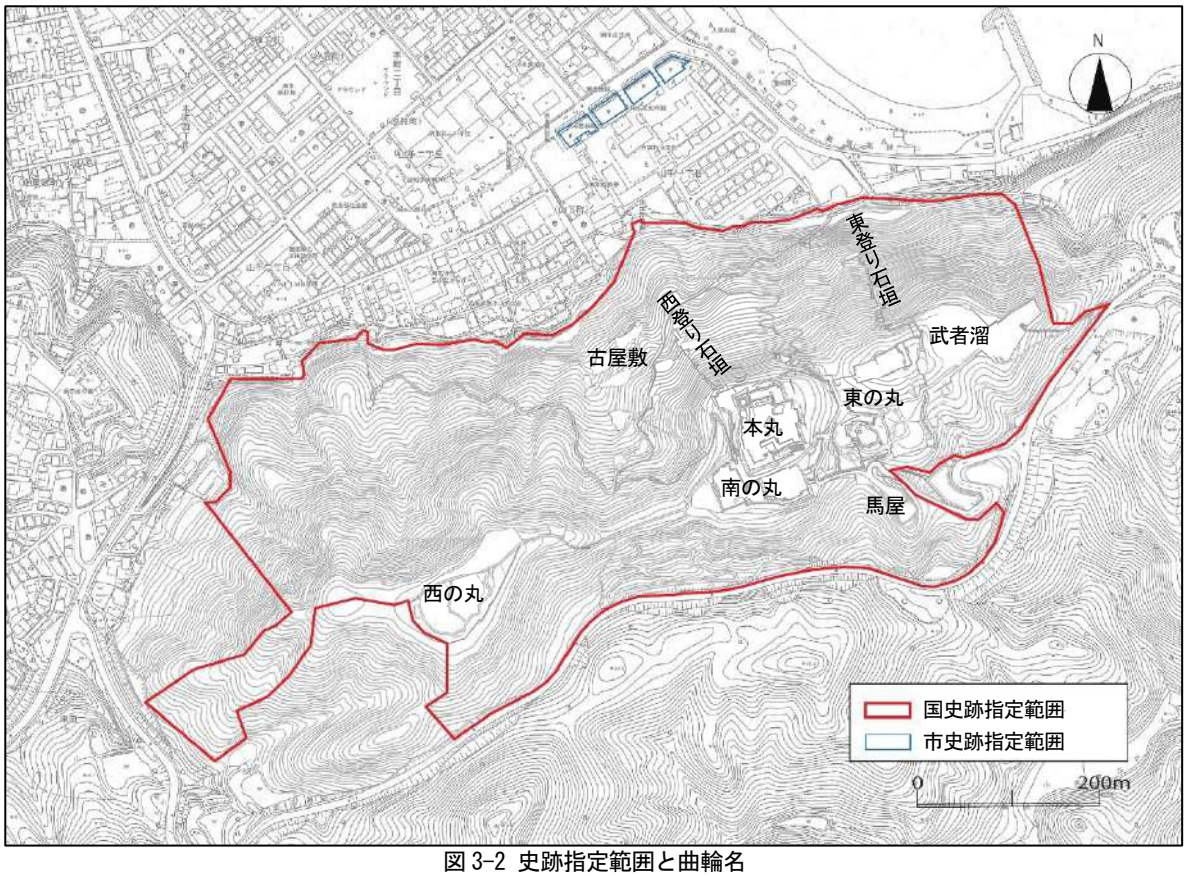


図 3-2 史跡指定範囲と曲輪名

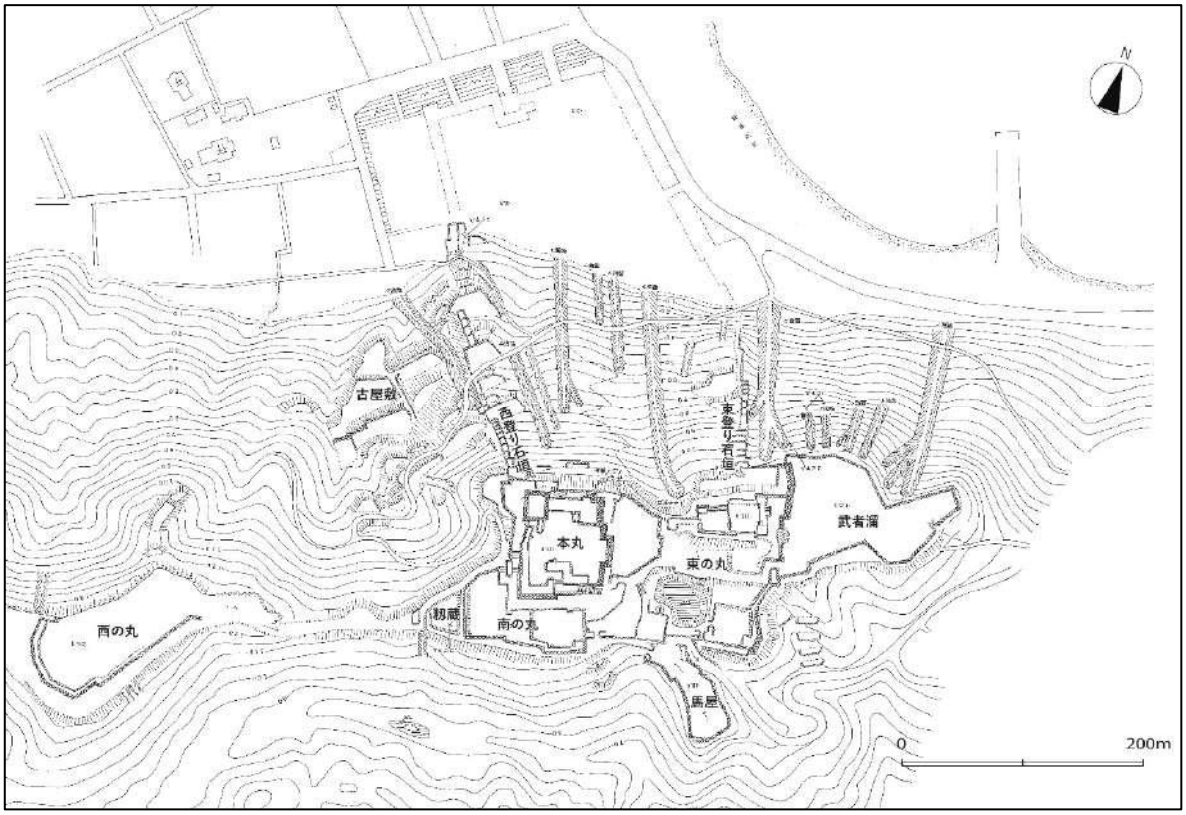


図 3-3 洲本城跡縄張図（『淡路洲本城』より一部改変）

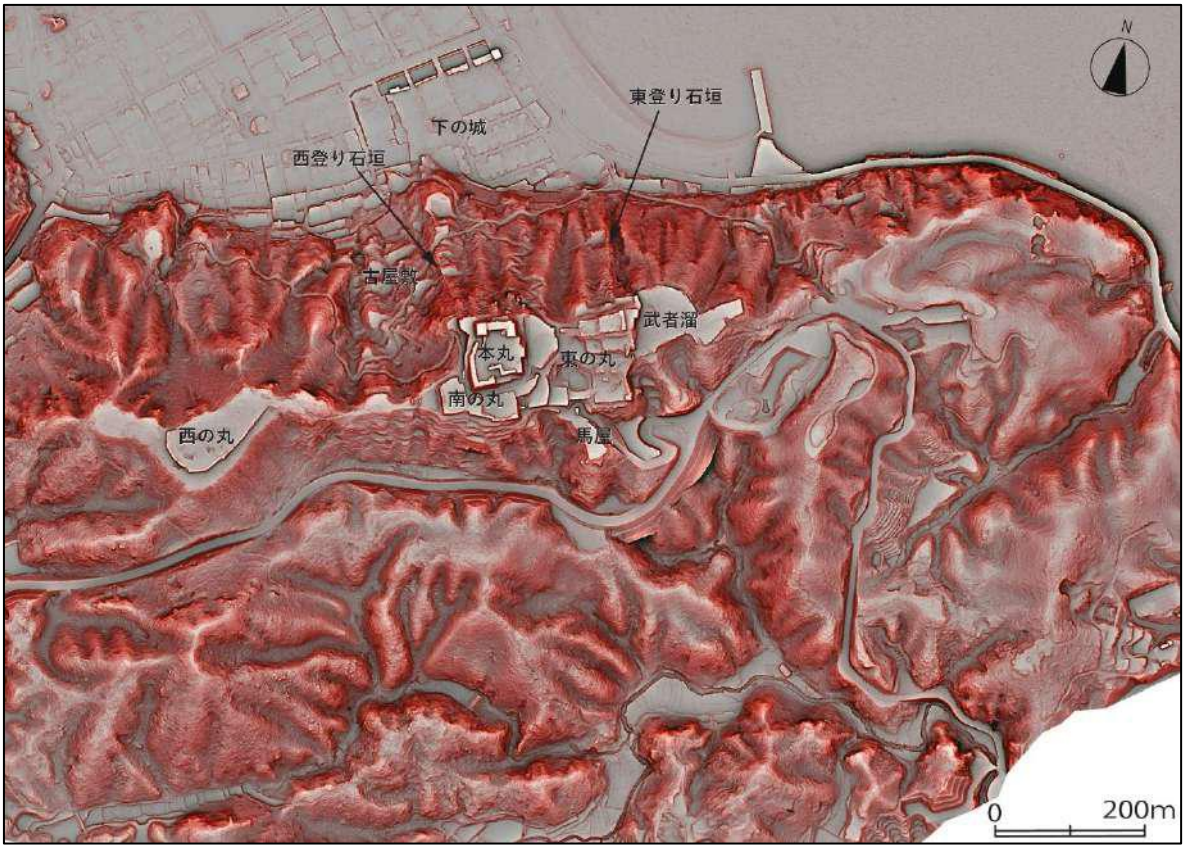


図 3-4 赤色立体地図（平成 30 年（2018）作成）

（２）指定に至る経緯

洲本城跡は、大阪湾に面する兵庫県洲本市の中心、洲本市街地の南にそびえる三熊山の標高約 130 mに位置する中世から近世初頭の総石垣の城郭である。本丸を中心に南の丸・東の丸・武者溜・馬屋・西の丸等の城郭遺構が残されている。

また、三熊山北斜面には 2 条の登り石垣があり、洲本城跡の特徴となっている。総石垣は天正期から慶長期にかけての築城であるが、随所に畝状竪堀が見られ、室町期の遺構の存在も十分に考えられる。本丸を中心に、室町期から桃山期にかけての古瓦が多数出土している。

発掘調査は、武者溜に位置する洲本測候所の建て替えに伴う調査、東の丸日月池周辺の公園化に伴う調査等を実施しているが、いずれの調査も遺構の保存を目的とし、公園化にあたっては盛土を行った後に整備が行われている。

洲本市民が誇りとする三熊山、洲本城を今後いかに保護活用していくかの方向性を得るために、諮問機関として平成 6 年度（1994）、市民有識者による三熊山ビジョン委員会が設置され、洲本城を史跡指定地とすることによって保護活用を図っていくとの答申が出された。

その流れを受けて、平成 7 年度（1995）に洲本城（上の城）が市の文化財に指定され、同 8 年（1996）3 月には指定申請予定地一帯が兵庫県の文化財（史跡）に指定された。

洲本城跡は、戦国時代から幕末まで淡路一国の統治の拠点となった城郭で、海に臨む水軍の拠点城郭としても貴重な遺跡である。遺構の遺存状況もきわめて良好であり、戦国期、文禄・慶長期、寛永期等の各時期の築城技術が層を成すように累積されている等の理由により、平成 11 年（1999）1 月 14 日に国の史跡に指定された。

写真 3-1 東登り石垣

写真 3-2 西登り石垣

（３）管理団体の指定

現在のところ、文化財保護法第 113 条第 1 項の規定による指定を受けた管理団体は存在しないが、洲本市が担うことが望ましい。

（４）土地等の所有関係

現在の国史跡指定地は、洲本市小路谷古城及び小路谷古城御熊山で、面積は 267,852.9 ㎡である。現在の所有関係は、洲本市所有地が 209,008.0 ㎡、民有地 58,844.9 ㎡である。

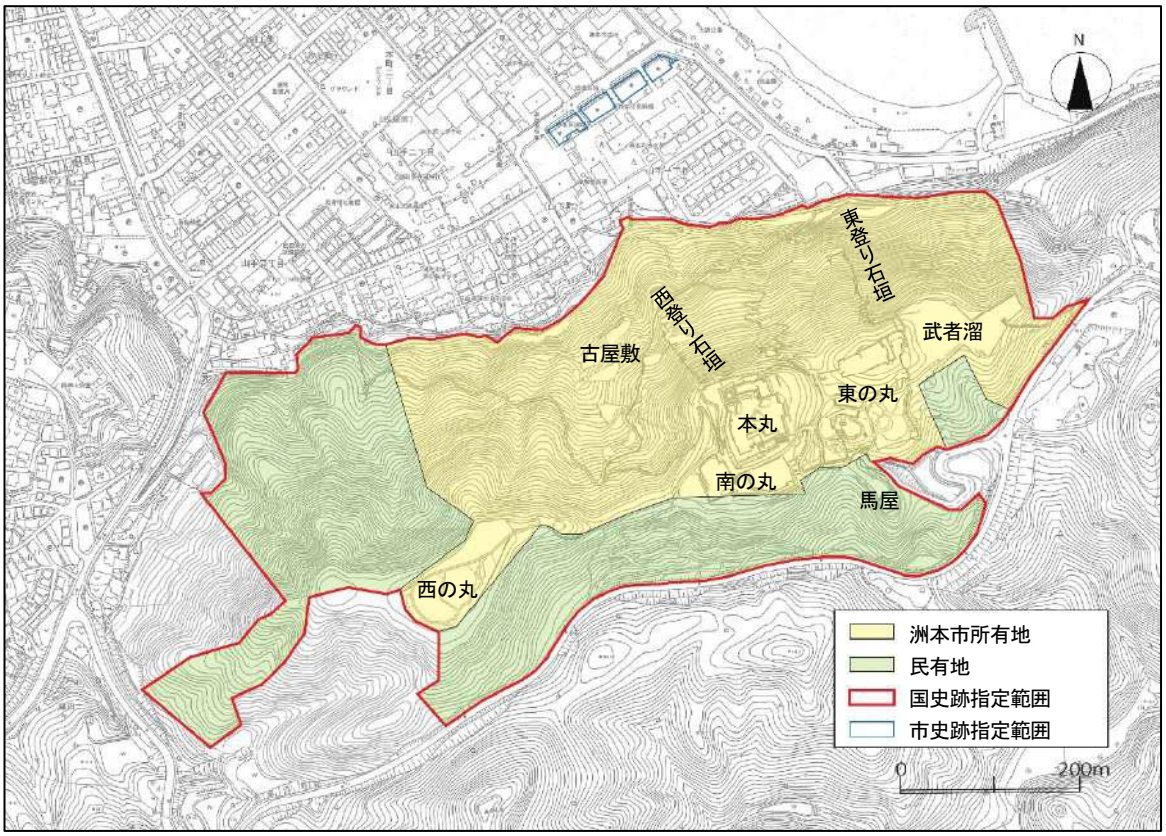


図 3-5 土地所有図

（５）市史跡について

名称：洲本城跡（下の城）

所在地：兵庫県洲本市山手一丁目 806-1

指定日：昭和 58 年（1983）7 月 20 日

所有者：洲本市

概要：洲本城（下の城）は、上の城と一体となって築城された。当初の築城は桃山時代であるが、現在見られる石垣や堀が造られたのは、蜂須賀氏が淡路支配の拠点を由良から洲本に移した寛永年間(1630 年代)以降と思われる。石垣の内側は礫岩、外側は白い花崗岩を使用しており、見られる城を意識していることが伺える。洲本城跡（下の城）のうち、石垣と堀部分が市史跡指定範囲である。

写真 3-3 北東櫓と堀

２. 洲本城の歴史

（１）洲本城築城以前

暦応 3 年（1340）、阿波の細川師氏（もろうじ）が淡路に派兵される。淡路国守護細川氏の誕生である。以後淡路細川氏は、争乱が起こるたびに阿波の細川氏とともに畿内、四国を転戦し、天下の秩序を保ってきた。

観応元年（1350）、足利義詮（よしあきら）が沼島の海賊討伐を紀州熊野水軍の一族安宅（あたぎ）氏に命じる。以後安宅氏は淡路島に土着し、由良を拠点に勢力を拡大していく。

延元 2 年（1337）	足利直義、阿波の細川頼春を淡路に派遣し淡路勢を討たせる
暦応 3 年（1340）	足利尊氏、頼春に淡路平定を命じ、頼春は弟の師氏を淡路に派兵、立川瀬の戦いで淡路勢を破り、師氏は淡路国守護として養宜に館を構える
観応 元年（1350）	熊野水軍の一族安宅氏が足利義詮の命により沼島の海賊討伐をする
永正 14 年（1517）	三好之長が細川尚春を攻めて淡路に侵入する

写真 3-4 養宜館跡の土塁

写真 3-5　養宜館跡の石碑

（２）安宅氏の時代

永正 16 年（1519）、阿波の三好之長が淡路守護細川尚春を滅ぼし、淡路細川氏は滅亡する。守護不在の淡路島は、国人衆が勢力を拡大する戦国時代に入る。中でも淡路水軍を率いた安宅氏は、淡路各地に城を構え、その主な城は「安宅八家衆」の城と呼ばれた。室町末期には、淡路でも伊勢の御師が布教活動を行っており、大永 2 年（1522）に売買された道者株（檀那株）の中に「すもと　同あたぎ殿」が記載されており、安宅氏の存在が確認できる。

『味地草』には、洲本城の築城について、永正 7 年（1510）説と大永 6 年（1526）説の両説が記されている。いずれも細川の京兆家で権力争いが行われている（両細川の乱）最中で、応仁の乱、明応の政変後の混乱期に洲本城が築城されている。ただし、大永 6 年（1526）説では、すでに淡路が三好に掌握された後であるため、三好氏の影響が排除できず、築城の背景が若干異なってくる。

永正 7 年（1510）	安宅河内守冬一が洲本城を築城する（説 1）
永正 16 年（1519）	淡路細川氏が阿波の三好之長に滅ぼされる
永正 17 年（1520）	三好之長が淡路を掌握し上洛する
大永 元年（1521）	将軍義稙、細川高国の専横を嫌い淡路へ
大永 6 年（1526）	安宅隠岐守治興が洲本城を築城する（説 2）
大永 8 年（1528）	炬口城主、安宅次郎三郎が三好氏に反旗を翻すが、蟇浦城主蟇浦藤次常利、栗原城主島田遠江守に鎮圧される

図 3-6　天文年中淡路諏本町並図（個人蔵）

天文 18 年（1549）、三好長慶（ながよし）の弟冬康（ふゆやす）が安宅家の養子となり、三好は淡路水軍を掌握する。畿内の足掛かりを構築した三好氏は、主家である細川氏を凌駕していく。

長慶は三好元長の長男で、次弟実休（じっきゅう）は阿波を治め、三男冬康は淡路を、四男一存（かずまさ）は十河家の養子となり讃岐を固めた。永禄年間には、山城・丹波・摂津・播磨・淡路・阿波・讃岐・伊予・和泉・河内・大和・若狭・丹後の一部等 13 カ国以上に及ぶ領国を形成し、三好政権と呼ばれた。淡路勢は、三好政権の片腕として畿内を転戦していく。

しかし、永禄 4 年（1561）には一存が病死し、翌 5 年（1562）には久米田の戦いで実休が戦死、永禄 7 年（1564）には松永久秀の讒言により冬康が自害させられ、同年には長慶も病死し、三好政権は瓦解していく。

天文 16 年（1547）	三好長慶の弟冬康らが河内で十七カ所の戦いに勝利し、河内の高屋城を攻める
天文 17 年（1548）	摂津の尼崎・別府川の戦いに参戦する
天文 18 年（1549）	冬康が安宅家の養子となり淡路水軍を掌握する
	江口の戦いで三好が堺の細川晴元を破る
天文 21 年（1552）	実休が阿波守護細川持隆を勝瑞で殺害する
天文 23 年（1554）	三好長慶、実休、安宅冬康、十河一存の兄弟が洲本で会談を行う
永禄 3 年（1560）	長慶、実休、冬康が再び洲本で会談を行う
	将軍足利義輝に抵抗した冬康が尼崎へ渡海する
永禄 5 年（1562）	久米田の戦いで実休が戦死する
	教興寺の戦いで畠山高政を破る
永禄 7 年（1564）	松永久秀の讒言により冬康が飯盛城で自害する
	長慶が病死する

（３）淡路十人衆の時代

冬康亡きあと、子の信康が跡を継ぐ。滝山城の戦いで織田信長方の松永久秀を破り、織田軍との戦いがはじまる。元亀元年（1570）には、野田城・福島城の戦いで織田方に勝利し、ここで「淡路十人衆」が登場する。「淡路四草」には、淡路十人衆が記されているが一次資料で誰が十人衆に列せられるかは確認されていない。しかし、冬康亡きあとも淡路の国人衆が一定のまとまりを見せていたことを示している。これは、阿波・讃岐・淡路の国人衆をまとめていた三好家の重臣篠原長房によるものであったが、長房失脚後は次第に三好家から離れていく。大阪湾で繰り広げられた第一次木津川口の戦いでは、安宅氏は織田方として参戦するが、安乎（あいが）の菅平右衛門によって接収された岩屋城は毛利方の拠点となった。第二次木津川口の戦いでは織田方が毛利水軍を退け岩屋城を奪還する。

天正 8 年（1580）、安宅氏は毛利方の度重なる調略を受け、毛利に与する動きを見せる。これが、秀吉による淡路攻めを呼ぶことになる。

永禄 9 年（1566）	滝山城の戦いで信康が松永久秀を破る
元亀元年（1570）	野田城・福島城の戦いで「淡路十人衆」が登場する
元亀 3 年（1572）	信康が織田信長に降伏する
天正 4 年（1576）	第一次木津川口の戦いで岩屋城が毛利方の拠点となる
天正 6 年（1578）	第二次木津川口の戦いで織田方が岩屋城を奪還する
天正 7 年（1579）	小西行長、安宅氏が毛利水軍を退ける
天正 8 年（1580）	安宅氏が毛利に与する動きを見せる

（４）秀吉の淡路攻め

信長は、対四国政策を大きく変換し、三好氏支援に動いていく。天正 9 年（1581）11 月に、淡路攻めが行われる。『信長公記』には、「（天正 9 年）11 月 17 日に秀吉軍が播磨より渡海し、20 日には播磨に戻る」と記されているが、近年発見された文書から淡路攻めがそれ以前の 8 月頃から周到に準備さ

れていたことが明らかとなっている。信長による四国攻めの準備段階として、淡路を確実に抑えにかかっていたことを示すものだが、この淡路攻めで、淡路を治める大名は派遣されていない。

天正 10 年（1582）の本能寺の変で、菅平右衛門が長宗我部の要請により洲本城を占領する。中国大返しの途中に明石に着陣した秀吉は、明智光秀との戦いを前に挟み撃ちされるのを恐れ、廣田蔵之丞に洲本城奪還を依頼する。洲本城は 1 日で奪還され、この年の 11 月に秀吉配下の仙石秀久が 5 万石で洲本城主となり、淡路の戦国時代は幕を閉じる。廣田蔵之丞宛の書状には、洲本城奪還後は知行地を与える旨が記されていたが、秀吉から知行地は与えられず、仙石秀久から知行地を宛がわれている。

天正 13 年（1585）、秀久は四国攻めの功により讃岐に転封し、代わって賤ケ岳七本槍のひとり脇坂安治（やすはる）が洲本城主となる。

天正 9 年（1581）	織田信長の命により、羽柴秀吉が淡路攻めを行う
天正 10 年（1582）	本能寺の変後、長宗我部の要請を受け、菅平右衛門が洲本城を占領する
	秀吉は中国大返し中に、廣田蔵之丞に洲本城奪還を依頼する
	秀吉配下の仙石秀久が 5 万石で洲本城主になる
天正 13 年（1585）	洲本城が四国攻めの前線基地となり、秀吉の弟秀長が洲本城から四国へ出陣する
	仙石秀久が四国攻めの功により讃岐に転封し、代わって脇坂安治が 3 万石（当初は 1 万 2600 石）で洲本城主になる

図 3-7 羽柴秀吉書状（廣田家文書）

図 3-8 仙石秀久知行宛行状（廣田家文書）

（５）脇坂安治の築城

洲本城に入城した脇坂安治は、淡路水軍を掌握し、水軍の将として九州攻めや小田原攻めに参戦、秀吉の天下統一に貢献した。安治は、入城後大坂城の西の出城として洲本城の改修に着手する。東西 800m、下の城まで含めると南北 600mの広大な総石垣の堅城に生まれ変わる。脇坂氏の石高は 3 万石と大名としては最小クラスである。小大名としては分不相応な城であるが、淡路国における秀吉の蔵入地 1 万 1000 石の管理を任されていたのと、城のある三熊山が砂岩の岩山であるため、石材運搬の人件費がかかっていないことなどから、実現できたと思われる。現存する洲本城の石垣は、脇坂治世の 24 年間で構築されたものである。脇坂以後の為政者による大規模な改修等は、記録がないため不明であるが、行われていないと考えられる。

天正 15 年（1587）	脇坂安治が九州攻めに参戦する
天正 18 年（1590）	脇坂安治が小田原攻めに参戦する
文禄 元年（1592）	脇坂安治が淡路水軍を率いて朝鮮半島へ出陣する（文禄の役）
文禄 5 年（1596）	慶長伏見地震で洲本城が被害を受ける
慶長 2 年（1597）	脇坂安治が再び朝鮮半島へ出陣する（慶長の役）
慶長 5 年（1600）	関ケ原の戦いに西軍として参戦するが、途中東軍に与し東軍勝利に貢献する
慶長 14 年（1609）	脇坂氏が伊予大洲に転封、洲本城は藤堂高虎の預かりとなる

図 3-9 城絵図（国文学研究資料館蔵　蜂須賀家文書 1220）

（６）洲本城廃城後

脇坂転封後、藤堂高虎の預かりとなり淡路に代官を派遣するが、慶長 15 年（1610）には池田輝政に淡路一国が与えられる。輝政は洲本城を使用せず、淡路島の北端の明石海峡に面した岩屋に城を築いて代官を派遣する。そして慶長 18 年（1613）には、輝政の三男忠雄が入部し、淡路島の大阪湾側の南端の由良城を築く。これら一連の動きは、大坂方の監視が主な目的であったと考えられ、大坂を攻める際に豊臣恩顧の大名がこの地にいることは、徳川にとっては都合が悪いため、家康の娘婿にあたる輝政に与えられたと考えられる。

輝政及び忠雄は、大阪湾に大坂方の船が入らないよう、明石海峡と紀淡海峡の入り口に城を築いた。従って、池田氏時代の淡路島は、対豊臣の最前線基地としての役割が主であり、池田氏による淡路一国の領国経営は十分に行き届いていなかったと推察される。

池田氏により使用されなかった洲本城は、事実上の廃城となる。

慶長 14 年（1609）	藤堂高虎は在城せず、淡路に代官を派遣する
慶長 15 年（1610）	淡路一国が池田輝政に与えられ、岩屋の絵島ヶ丘に城（近世岩屋城）を築き家老が派遣される
慶長 18 年（1613）	池田輝政の三男忠雄に淡路一国が与えられ、由良に城（由良成山城）を築く
元和 元年（1615）	大坂の陣後、徳島藩の蜂須賀至鎮に淡路一国が加増され、由良に城代が派遣される

写真 3-6 由良城跡（成山）

写真 3-7 由良城（成山）に残る石垣

（７）蜂須賀氏の登場と由良引け

大坂の陣の功により、蜂須賀至鎮（ししげ）に淡路一国が加増され、元和２年（1616）には筆頭家老の稲田示植（しげたね）が将軍の上意により由良城代として派遣される。その後免職となり脇城に戻るが、寛永８年（1631）に淡路国城代として再来する。

池田氏から由良城を引き継いだ蜂須賀氏であるが、侍屋敷は周りの囲いもなく、海岸の浜から直接馬で駆けつける有様で、示植の屋敷等は波が打ち寄せていたと記されている。また、交通の便が悪く淡路一国を治めるには非常に不便なため、幕府の許可を得て城と町を洲本に移す「由良引け」が、示植主導で行われた。それにより、洲本は脇坂以来約四半世紀ぶりに淡路の都に復することになる。

元和 元年（1615）	大坂の陣の功により蜂須賀至鎮に淡路一国が加増される
元和 2 年（1616）	徳島藩筆頭家老稲田示植、由良城代として淡路へ赴任する
元和 7 年（1621）	稲田示植、由良城番免職となり脇城に戻る
寛永 2 年（1625）	森甚太夫、由良城番になる
寛永 8 年（1631）	稲田示植、淡路国城代として再来し由良引けを主導する
寛永 11 年（1634）	由良城に破却命令が出される
寛永 12 年（1635）	由良引けが一応の完成を見る（洲本城下町の誕生） 三熊山北麓に御殿（洲本城下の城）が築かれる
寛永 15 年（1638）	阿波九城及び洲本城が破却される（洲本城は石垣を残す）

写真 3-8 森甚太夫供養塔

写真 3-9 由良心蓮寺山門（由良徳島藩邸の正門）

（８）明治以後（城機能の終焉）

安政元年（1854）、プチャーチンの大阪湾来航に伴い、川路聖謨（かわじとしあきら）が大阪湾防禦計画を作成する。徳島藩は幕命により台場築造に取り掛かり、岩屋地区、洲本地区、由良地区に台場が築造される。その後明治に入り、京阪神防衛のため、紀淡海峡に砲台群が築造される。由良要塞と呼ばれる陸軍の一等要塞である。近代を迎えても、淡路の軍事的重要性は変わらず、由良要塞は縮小整理されながら終戦まで存続される。

洲本城（下の城）は、明治以後に取り壊される。一部が数度の移転を繰り返しながら「金天閣」として、洲本八幡神社の境内に残る。山上の洲本城は、江戸時代は禁足地であったが、明治以後に公園として開放される。昭和４年（1929）には、御大典記念として鉄筋コンクリート製の城型休憩所（模擬天守）が建築され、現在も洲本城跡のランドマークとして市民に親しまれている。

嘉永 7 年（1854）	稲田家の別荘が益習館（稲田家の学問所）となる
文久 元年（1861）	洲本、由良に台場が完成する
明治 元年（1868）	明治維新により洲本御殿が解体される（一部が金天閣として残存）
明治 3 年（1870）	庚午事変（稲田騒動）により、益習館や稲田家、稲田家臣の邸宅が焼失する
明治 22 年（1889）	由良要塞の築城が開始される
明治 37 年（1904）	洲本川の付替え工事が行われる
昭和 3 年（1928）	御大典記念として城型休憩所（模擬天守）を建築する（完成は昭和４年（1929））

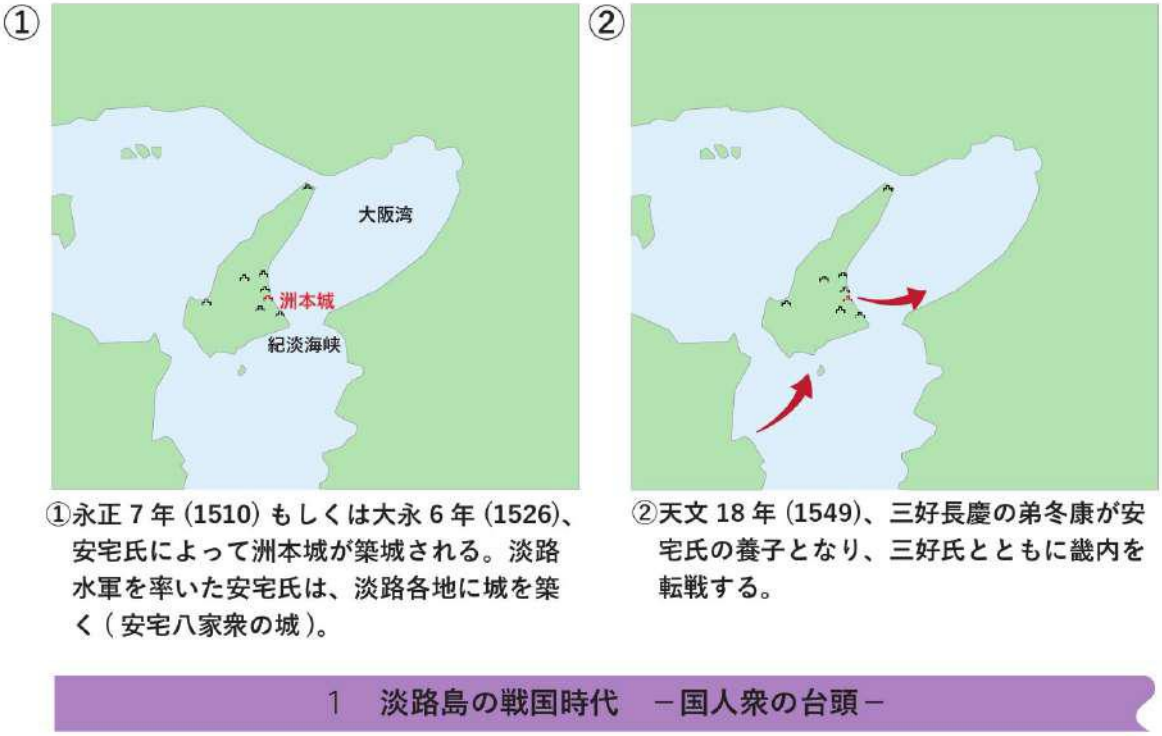
写真 3-10 由良要塞（生石山第１砲台跡）

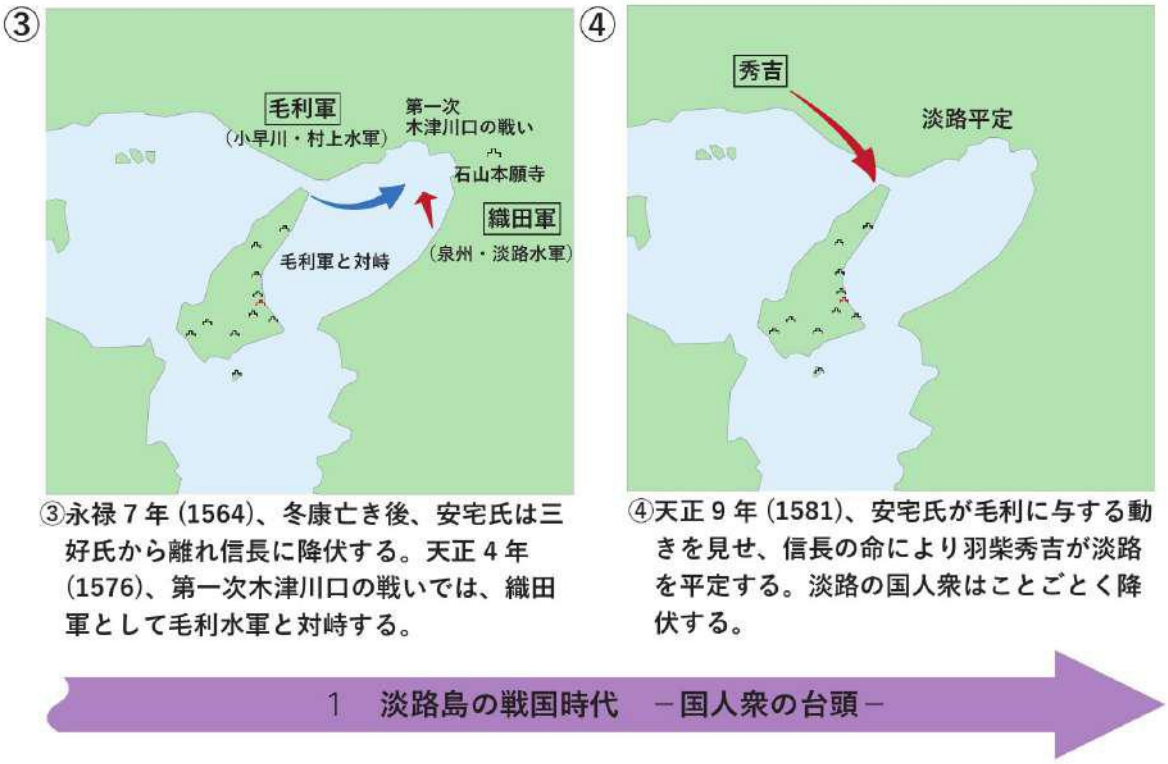
写真 3-11 由良要塞（生石山第４砲台跡）

（９）淡路島・洲本の地理からみる歴史変遷

（１）から（８）で述べてきたように、洲本城は地理的特徴から、時代によって城の意味合いが異なる。この地理的特徴を踏まえ、歴史変遷概念図を以下に示す。

（文章・図は参考文献を基に作成。）





⑤

⑤天正 10 年（1582）、本能寺の変の後、秀吉配下の仙石秀久が洲本城に入城する。

⑥

⑥天正 13 年（1585）、四国攻めの功により仙石秀久が讃岐に転封、代わって賤ケ岳七本槍の脇坂安治が洲本城に入城する。翌年には加藤嘉明が志知城に入る。

2　織豊政権の水軍基地　－淡路水軍の拠点－

⑦

⑦脇坂安治は、大坂城を守る城として、総石垣の堅城に改修、九州攻めや小田原攻め、朝鮮の役に淡路水軍を動員する。

⑧

⑧慶長 5 年（1600）、関ケ原の戦い。脇坂安治は西軍として参戦するも、東軍に与し本領を安堵される。

2 織豊政権の水軍基地－淡路水軍の拠点－

3　豊臣包囲網

⑨

⑨慶長 14 年（1609）、安治が伊予大洲に転封、洲本城は藤堂高虎の預かりとなり、代官が派遣される。

⑩

⑩慶長 15 年（1610）、淡路国は池田輝政に加増され、岩屋に城を築く。事実上の洲本城廃城。慶長 18 年（1613）には、輝政の三男忠雄に淡路一国が与えられ、由良に城を築く。

3　豊臣包囲網　－大坂城を守る地から攻める地へ－

⑪

⑪元和元年（1615）、徳島藩主蜂須賀至鎮に淡路一国が加増され、淡路島は徳島藩となる。

⑫

⑫寛永 8 年（1631）、徳島藩は拠点機能を由良から洲本に移す「由良引け」を約 4 年の歳月をかけて実施。上の城は使用せず禁足地となる。

4　徳島藩の淡路政庁へ　－山城機能の終焉－

⑬

⑬安政元年（1854）、幕命により、岩屋地区・洲本地区・由良地区に台場を築造する。

⑭

⑭明治 22 年（1889）、由良要塞の生石山堡塁砲台築造が始まる。

5　京阪神防衛の要衝　－台場と砲台－

表 3-1 洲本城の歴史

年　代	洲本城の歴史	関連する主な動向
観応元年 (1350)	熊野水軍の一族安宅氏が足利将軍の命により由良を拠点に沼島の海賊討伐をする。	
永正 14 年 (1517)	三好之長が細川尚春を攻めて淡路に侵入する。	
永正 16 年 (1519)	淡路守護細川氏、阿波の三好之長に滅ぼされる。（千光寺梵鐘に追銘あり）	
大永 6 年 (1526)	安宅隠岐守治興が洲本城を築城する。 永正 7 年(1510) 安宅河内守冬一築城説あり。	
大永 8 年 (1528)	炬口城主、三好氏に反旗を翻し籠城する。	
天文 16 年 (1547)	冬康らが河内で十七カ所の戦いに勝ち、その戦いで河内の高屋城を攻める。	
天文 17 年 (1548)	摂津の尼崎・別府川の戦いに参戦する。	
天文 18 年 (1549)	三好長慶の弟冬康が、安宅家の養子となり淡路水軍を掌握する。 江口の戦いで三好が堺の細川晴元を破る。	鉄砲伝来
天文 23 年 (1554)	三好長慶、三好実休、安宅冬康、十河一存の三好四兄弟が第一回洲本会談を行う。	
永禄 3 年 (1560)	三好四兄弟が第二回洲本会談を行う。	桶狭間の戦い
永禄 5 年 (1562)	冬康が三好軍に参陣して河内の畠山高政軍を敗退させる。 冬康が岸和田城に配置される。	
永禄 7 年 (1564)	河内飯盛城で三好長慶が安宅冬康を自害させる。 三好長慶死去。	
永禄 9 年 (1566)	安宅信康（冬康の子）が滝山城の戦いで松永久秀を破る。	
元亀元年 (1570)	将軍足利義昭を擁立して中央に進出してきた織田信長に、石山本願寺が正面から対抗する。 信康も石山本願寺に味方し淡路勢を率いて参戦する。	
元亀 3 年 (1572)	信康が織田信長に味方し、石山本願寺を援助する毛利軍と対戦する。	
天正 6 年 (1578)	信康が病死する。 河内守清康（信康の弟）が洲本城と由良城の城主となる。	
天正 9 年 (1581)	羽柴秀吉の淡路攻めにより、淡路の国人衆がことごとく降伏する。 清康が病死し、淡路の安宅氏が滅ぶ。	
天正 10 年 (1582)	菅平右衛門が洲本城を占領する。 6 月：羽柴秀吉が明智光秀討伐のため山崎に向う途中、廣田蔵之丞に依頼し洲本城の菅平右衛門を攻める。 11 月：秀吉は、四国の長宗我部に対する備えとして、仙石秀久に５万石で洲本城を与え、派遣城主が生まれる。	本能寺の変
天正 11 年 (1583)	仙石秀久は讃岐で長宗我部との戦い（引田の戦い）に臨んだが、陸戦で敗退したため洲本に戻る。	
天正 13 年 (1585)	豊臣秀吉の命令で、弟秀長が洲本城より四国攻めに出陣する。その後、仙石秀久は讃岐高松城主になり、脇坂安治が 3 万石で洲本城主となる。以後 24 年間居城し、この間に総石垣の城に改修される。	
天正 14 年 (1586)	加藤嘉明が志知城に 1 万 5 千石で入城する。	

年　代	洲本城の歴史	関連する主な動向
天正 15 年 (1587)	豊臣秀吉の命令で、脇坂安治が九州攻めに参戦する。	
天正 18 年 (1590)	豊臣秀吉の命令で、脇坂安治が小田原攻めに参戦する。	豊臣秀吉が天下統一
文禄元年 (1592)	豊臣秀吉の朝鮮出兵に、脇坂安治が水軍の将として参加する。	文禄の役（朝鮮出兵）
慶長元年 (1596)	慶長伏見地震で、洲本城が被害を受ける。	
慶長 2 年 (1597)	脇坂安治が、再び朝鮮へ出兵する。	慶長の役（朝鮮出兵）
慶長 3 年 (1598)		豊臣秀吉が死去
慶長 5 年 (1600)	脇坂安治が、関ヶ原の戦いに西軍として出陣し、途中東軍に与し、東軍の勝利に貢献する。	関ヶ原の戦い
慶長 8 年 (1603)		江戸幕府の成立
慶長 14 年 (1609)	脇坂氏が伊予大洲城を与えられ淡路を去り、藤堂高虎が淡路を与えられたが、在城せず代官のみ派遣される。	
慶長 15 年 (1610)	徳川幕府は、淡路国を池田輝政に与える。岩屋の絵島ヶ岡に新城を築き家老を派遣する。	
慶長 18 年 (1613)	輝政の三男忠雄に淡路一国が与えられ、忠雄は大坂城を包囲するために由良城を新築し、洲本城へは入らず。	
慶長 19 年 (1614)		大坂冬の陣
元和元年 (1615)	徳川幕府は、池田忠雄を備前岡山に移す。大坂の陣の功により徳島藩主蜂須賀氏が淡路一国を領有する。これにより淡路は徳島藩となる。 蜂須賀氏は、池田氏に続いて由良を拠点とする。 7 月：牛田一長入道宗樹に由良城を預けてこれを由良城番として、これに岩田七左衛門、篠山加兵衛の２人をつけて置く。	大坂夏の陣で豊臣氏滅亡 一国一城令を制定
元和 2 年 (1616)	6 月：牛田一長入道宗樹が亡くなる。 その後任として稲田示植が由良城番となる。	
元和 7 年 (1621)	示植が免職となって阿波の脇城に帰る。 その後岩田と篠山の二人は奉行として由良城に入る。	
寛永 2 年 (1625)	森甚太夫が由良城代となる。	
寛永 8 年 (1631)	淡路支配の拠点を由良から洲本に移す（由良引け）。	
寛永 11 年 (1634)	由良城破却の命を受ける。	
寛永 18 年 (1641)	徳島藩迎賓館として三熊山北麓の洲本城内（下の城）に御殿が建築される。	
寛政 10 年 (1798)	藩校洲本学問所ができる。	
享和 2 年 (1802)	「須本御山上絵図」に東の丸と南の丸の一部に「崩」の記載がある。	
安政元年 (1854)	徳島藩が幕命により洲本・由良に台場築城を開始する。 稲田学問所を下屋敷に移し「益習館」と称す。	

年　代	洲本城の歴史	関連する主な動向
文久元年 （1861）	由良高崎台場が完成する。	
明治２年 （1869）		阿波・淡路の一部が徳島藩となる
明治３年 （1870）	庚午事変（稲田騒動）がおこる。	
明治４年 （1871）		淡路島全域が名東県に属する
明治 22 年 （1889）	由良生石山砲台が起工する。これにより由良要塞の堡塁砲台築造がはじまる。	
明治 29 年 （1896）	阪神間防衛の拠点として、由良要塞司令部が開設する。多くの砲台が整備され、由良のまちに兵舎が建ち並ぶ。	
明治 36 年 （1903）	金天閣が、津名郡・三原郡組合立淡路高等女学校の「作法室」となる。	
明治 37 年 （1904）	洲本河川の付替を行う。	
明治 39 年 （1906）	金天閣が洲本町に委譲される。	
大正 14 年 （1925）	金天閣が八幡神社境内へと移転される。	
昭和 3 年 （1928）	御大典記念として洲本城模擬天守の建築が開始される。（完成は昭和 4 年（1929））	
昭和８年 （1933）	金天閣が洲本町から八幡神社に委譲される。	
昭和 58 年 （1983）	下の城の内、石垣と堀部分が市の指定文化財に指定される。（7 月 20 日） 金天閣が市の指定文化財に指定される。	
昭和 59 年 （1584）	金天閣が県の重要文化財に指定される。	
平成６年 （1994）	市の有識者による三熊山ビジョン委員会が設置される。	
平成７年 （1995）	上の城が市史跡に指定される。（4 月 22 日）	阪神・淡路大震災 洲本市は震度６を観測
	城郭談話会による『淡路洲本城』が発行される。	
平成８年 （1996）	上の城が県の指定文化財に指定される。（3 月 22 日）	
平成 11 年 （1999）	洲本城跡が国の指定文化財に指定される。（1 月 14 日）	
平成 25 年 （2013）		淡路島地震 洲本市は震度５弱を観測

出典一覧

文献名	著　者	発行年	備考
『信長公記』	太田牛一	慶長 15 年（1610）以降	
『南海治乱記』	香西成資	正徳 4 年（1714）	
『淡路常盤草』	仲野安雄	享保 15 年（1730）	
『淡路草』	藤井容信、藤井彰民	文政 8 年（1825）	
『堅磐草』	渡辺月石	天保 3 年（1832）	
『淡路国名所図会』	暁　鐘成	嘉永 4 年（1851）	
『味地草』	小西友直、小西錦江	安政 4 年（1857）	
『淡嶋古城記』	―	安政 3 年（1856）6 月 18 日写し	淡路文化史料館収蔵史料目録第 5 集『新見貫次氏収集文書』
『淡路古城記』	―	昭和 15 年（1940）2 月写し	淡路文化史料館収蔵史料目録第 5 集『新見貫次氏収集文書』
『太閤記』	小瀬甫庵	寛永 2 年（1625）	
『黒田家譜』	貝原益軒	元禄 元年（1688）	
『脇坂家文書』	―	―	兵庫県史, 史料編中世一
『広田家文書』	―	―	兵庫県史, 史料編中世一
『寛永諸家系図伝』	―		
『太平記』	―	―	

以下は『味地草』に記載の出典

『将軍家譜』	林羅山	―	
『応仁記』	不明	15 世紀後半頃	
『天正記』	大村由己	天正期	
『本朝武林伝』	―	―	
『諸家大秘録』	―	元禄～享保頃	

３. 城郭関連遺構

（１）安宅八家衆の城

「安宅八家衆」の城とは、戦国時代に淡路島で最大の勢力を誇った安宅氏が淡路各地に築いた城で、『味地草』等にその記述がある。江戸時代後期の文献であるため、戦国当時このように呼ばれていたかは不明である。8 城のうち 6 城が洲本市内にあり、紀州熊野出身の安宅氏が大阪湾側にその勢力を誇っていたことが想定される。

8 城のうち、白巣城、炬口城は土塁や堀切等、当時の遺構が良好に残っており、淡路島における戦国時代の築城技術を知る上で貴重な山城である。よって、令和 2 年（2020）3 月 13 日に白巣城、炬口城が兵庫県の史跡に指定されている。

図 3-10 安宅八家衆の城

１）岩屋城

岩屋城は 2 城存在した。ひとつは淡路島の北先端の明石海峡に面した丘陵上に位置した戦国時代の安宅八家衆の城である。もうひとつは、絵島ヶ丘と呼ばれる山上に位置した城で慶長 15 年（1610）に池田輝政が築城した城である。

安宅八家衆の岩屋城は、「俎板（まないた）山」や「松尾山」と呼ばれる山にあり、瀬戸内海から大阪湾に入る明石海峡を睨む要衝の地に築かれている。築城年代は不明だが、天正 4 年（1576）の第一次木津川口の戦いでは、安乎の菅平右衛門によって接収され、毛利水軍 800 艘の前線基地となった。天正 6 年（1578）の第二次木津川口の戦いでは、九鬼嘉隆の新造鉄船により織田方に占領されている。天正 9 年（1581）6 月には再び毛利により占領され、11 月の秀吉の淡路攻めで再度織田方に占領された。翌 10 年（1582）の本能寺の変で秀吉が中国大返しの途中に、堀秀政に宛てた書状に「岩屋城、郡家城、洲本城、志知城を抑えた」ことが書かれており、岩屋城が軍事上非常に重要な場所にあった事がわかる。

池田輝政の岩屋城は、安宅氏の岩屋城より東側の小丘陵上に位置する。輝政に淡路一国が与えられた慶長 15 年（1610）に築城された。後世の破壊により現在は往時の姿を留めていない。慶長 18 年（1613）に輝政の三男忠雄に淡路一国が与えられ、由良に城を築いている。これまで由良城築城により岩屋城は廃城となったとされてきた。しかし、蜂須賀氏が淡路を拝領した際に、池田氏から岩屋城の請取りをした慶長 20 年（1615）閏 6 月 16 日付の「淡路岩屋城中請取状」（鳥取県立博物館蔵）があり、岩屋城が由良城築城後も徳川方による大坂方の包囲網の一翼を担っていたことが判明した。またこの書状の中には、「天守」の文字があり、岩屋城に天守があったことが判明している。

２）由良城

洲本市由良にある由良城も岩屋城同様に 2 城存在した。ひとつは古代より港として栄え、南海道の淡路島の玄関口であった由良駅の北側、現在の四丁目口の丘陵上に位置した安宅八家衆の城で、由良古城とも呼ばれる。もうひとつは、由良古城の東側の成山山上に位置した池田忠雄が慶長 18 年（1613）に築城した由良城で、別名成山城とも呼ばれる。

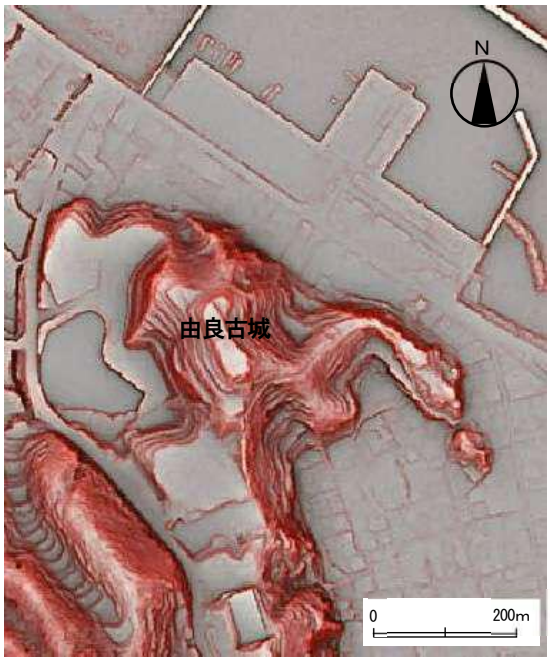


図 3-11 由良古城赤色立体地図

安宅八家衆の由良城は、淡路水軍を率いた安宅氏の本城である。紀淡海峡に面した由良は、古代より天然の良港として栄えていた。文安 2 年（1445）から同 3 年（1446）の『兵庫北関入船納帳』には、淡路の船 210 隻のうち由良船籍が 125 隻であったことが記されている。この地を抑えることは、軍事上、経済上非常に重要であったことがわかる。現在は、山上に平坦面が数段確認されるが、土塁や堀切等の遺構は確認できない。安宅氏の本城であるにも関わらず規模が非常に小さい。この時代、対岸の成ヶ島は陸続きであったため、池田氏の由良城部分までその範囲が及んでいた可能性も考えられる。城主は安宅冬康や冬康の子の信康、清康で、『太閤記』には秀吉の淡路攻めで池田元助が十重二十重と由良城を包囲し、城主安宅

河内守が降伏したと記されている。『黒田家譜』には、黒田官兵衛が城主安宅河内守を斬ったと記されており、その時の刀が「安宅切」として国の重要文化財に指定されている。

池田氏の由良城は、徳川の大坂方監視が主な目的であったと考えられる。元和元年（1615）、蜂須賀氏に淡路一国が与えられ城代が派遣されたが、交通の不便さ等から寛永８年（1631）に洲本に城と町を引っ越す「由良引け」が行われ廃城となった。

３）白巣城

洲本市五色町鮎原三野畑にある白巣城は、淡路島の中央、先山山系の標高 336mに位置する淡路島で最も高い場所にある城である。「淡路四草」には安宅氏が二、三代居住したと記されている。城主は安宅冬秀とされ、秀吉の淡路攻めの際に国人衆の中で唯一抵抗し、攻め滅ぼされたといわれる。その時の「竹の皮合戦」や「黄金の鶏」等の伝説が今も地元で語り継がれており、周辺には城関連の地名が数多く残っている。

曲輪は、自然の地形を活かした構造で、土塁や堀切が良好に残っている。馬繋場北側の堀切は淡路島の城で最大の規模を誇る。平成 29 年（2017）に実施した赤色立体地図により、本丸と西の丸の間の南斜面に畝状竪堀らしき遺構が確認された。

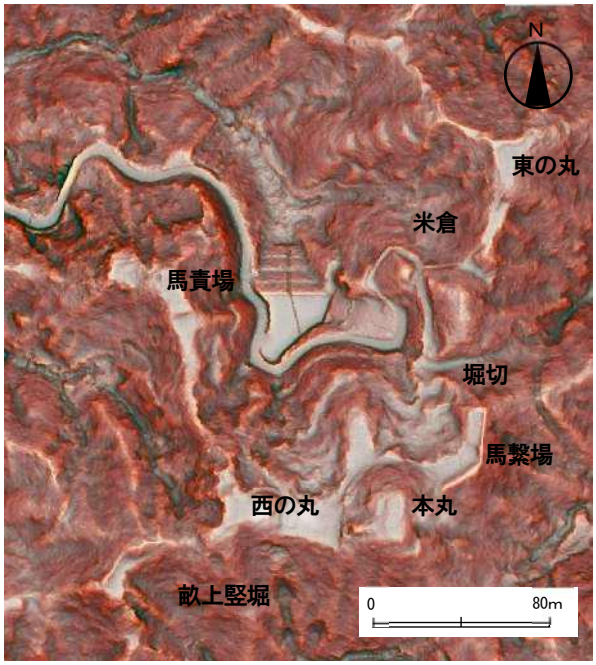


図 3-12 白巣城赤色立体地図

４）猪鼻城

洲本市千草にある猪鼻城は、標高 320mの猪鼻山（別名台山）山上にあり、安宅冬俊によって築かれたとされる。城周辺には、次郎ヶ谷、入道ヶ原等の地名があり、城主一族の宅地跡といわれている。主郭部には、東側の南北に虎口があり、周囲を土塁により囲っている。また南側土塁の裾には土止めの石垣が確認される。主郭部虎口は、非常に強固に築かれており、特に南側は枡形虎口で、奥には櫓台跡も確認される。北側は入り口付近に石垣があり、更に外側に段曲輪状の平坦面が連続している。自然の地形を活かした縄張りで、各尾根の上部が削られ平坦面を形成している。また各曲輪に数段の石積みが確認される。主郭部からは洲本城や炬口城が良く見える。

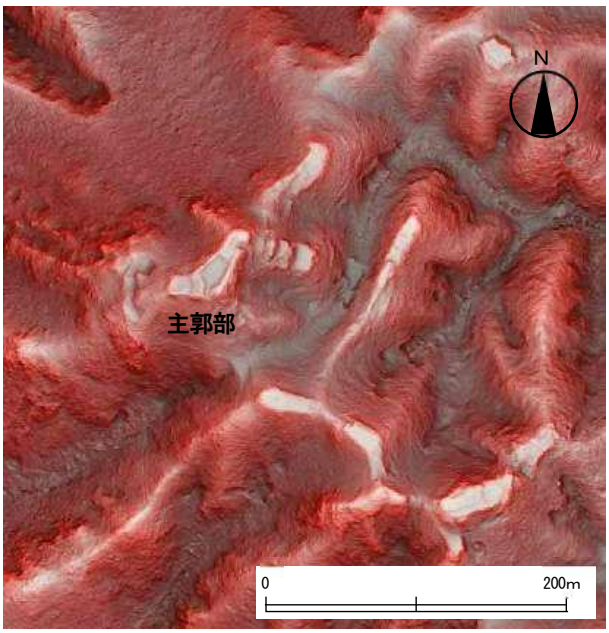


図 3-13 猪鼻城赤色立体地図

５）炬口城

洲本市炬口にある炬口城は、淡路島の中央東岸の大阪湾に面した標高約 96mの万歳山の山上に位置する。城主は安宅秀興（ひでおき）とされ、永正 16 年（1519）に淡路細川氏が滅亡した際、先山千光寺の梵鐘（国重要文化財）が何者かに売り払われたのを買い戻して寄進したのが、安宅秀興である。梵鐘にはそのことが追刻銘されている。炬口城も他と同じく秀吉の淡路攻めで降伏したと伝わる。

曲輪は本丸、二の丸、出丸からなり、本丸は東西、南北ともに約 50mで曲輪の大きさは淡路島で最大である。本丸の周囲は土塁で囲われており、外側の堀切が土塁をより一層効果的にしている。東西に虎口があり、北側には櫓台、西側の緩斜面には畝状竪堀も確認される。その構造から、戦国の一時期ではなく、秀吉の時代まで使われていた可能性が高く、戦国期から織豊期の築城技術の変遷を知る上で非常に貴重な城である。

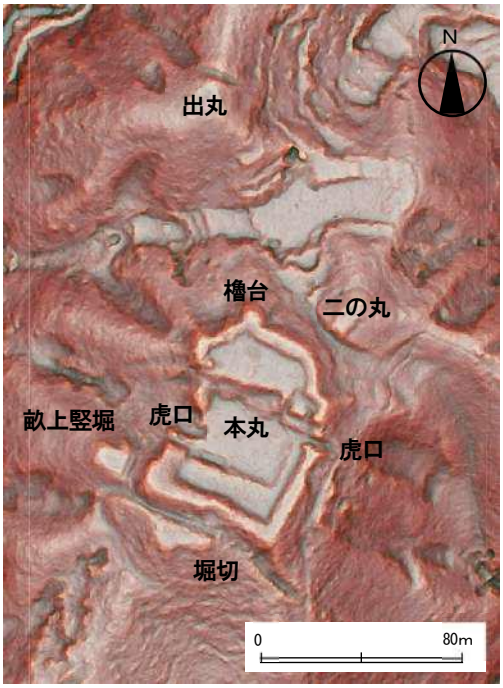


図 3-14 炬口城赤色立体地図

６）安乎城

洲本市安乎町にある安乎城は、別名直田城とも呼ばれ、安宅氏が築いたと伝わる。『味地草』等の「淡路四草」には、炬口城主安宅秀興が隠居し安乎城に移り住んだと記されている。場所は、岩戸川の下流域にあり、北側には菅平右衛門の居城であった菅館がある。遺構はほとんど確認できず、「城の腰」等の関連地名がわずかに残っているのみである。

７）湊城

湊城は、南あわじ市湊の里地区の丘陵の先端部で、安宅八家衆の城の中で唯一淡路島の西海岸に位置する。安宅氏によって築かれたとされるが、詳細は不明である。天正 9 年（1581）の秀吉の淡路攻めで滅亡したと伝わる。

（２）洲本城城下町

１）城下町概要

洲本城城下町は、①安宅時代、②仙石・脇坂時代、③蜂須賀時代の変遷を経て徐々に形成されたと考えられる。①～③までは、絵図から読み取れる城主ごとの城下町の変遷を示し、２）では現存する歴史的要素について述べていく。

①安宅時代

「天文年中淡路諏本町並図」（図 3-15）が、江戸期の絵図と大幅に異なっている点は、砂州が未発達で江戸期のように大浜海岸が形成されておらず、新漁師町（旧町名）の位置するあたりが「沖の洲」（島）となっており、現在の洲本八幡神社の近くまで入江となっている点である。北は塩屋川、西は曲田山から塩屋川に流れる川が沼をつくっていることが読み取れる。その中に町屋や侍屋敷が描かれている。この絵図の信憑性は乏しいといわれており考古学的な検証が必要だが、地形的には砂洲発達以前の洲本のすがたを伝えているとも考えられる。

また『味地草』には「安宅家洲本城在城の時は、外町一円は水田にして、内町半分は入海、町屋二百戸許、農家漁家等も幽にあり、士館も五十六戸あり」の記載がある。しかし、安宅時代の段階で、全家臣団の城下集住は考えられないので、これらは近世城下町のイメージで安宅時代を描いたものと思われる。

図 3-15 天文年中淡路諏本町並図（個人蔵）
（天文年中頃の洲本の様子を描いたものだが、嘉永 6 年（1853）に写したものを明治 24 年（1891）に再び写したもの）

②仙石・脇坂時代

現在の洲本城城下町は、下の城（蜂須賀居館）の北側に形成された「内町」とその西側に形成された「外町」からなる。この内町と外町は城下町のプランが異なっており、仙石・脇坂氏の時代には「内町」が形成されたと考えられる。

内町とは、南を三熊山、東を大阪湾、北が塩屋川（洲本川）、西は曲田山から流れる川（小河川）を利用した堀で囲まれた区域のことである。

安土桃山時代になると、近世的城郭が出現するとともに、大名家臣の城下集住が進み、城下町の建設が進められるようになる。脇坂安治洲本在城のころになると、直接的な資料はないものの、江戸期の内町の地に家臣の屋敷が建ち、商工業者も集まり、小規模ながらも城下町的な集落があったと考えられる。

内町の特徴は、大きくわけて四つある。

一つ目は、町割が城館から北西方向に延びる御門筋を主軸にして碁盤の目状の地割となっていることである。「城絵図」（図 3-16）を見ると、侍屋敷の間口がほとんど南北方向の街路に面している。つまり、街路を縦に通す「縦町型」として城下町が形成されたと考えられる。

二つ目は、内町の四周を、南は三熊山、東は大阪湾、北は塩屋川（洲本川）、西を小河川で囲む、「総郭型」であることである。総郭型とは、城下町全体を惣構で囲う形式である。

三つ目は、町屋を侍屋敷で囲っていることである。

四つ目は、外町に比べてＴ字路が多用されていることである。これは、市街戦を想定し、敵が真っ直ぐに城へ突進するのを防ぐためである。

図 3-16 城絵図（国文学研究資料館蔵　蜂須賀家文書 1220）（一部補足）

また、天正 20 年（1592）「洲本中町甚四郎外宛　脇坂安治感状」（図 3-17）では、文禄の役に参戦した人物（船の漕ぎ手）として「すもと中町」の３人の名前がみえるが、このことは「脇坂段階＝織豊期の城下町が存在したこと」の直接の証拠ではないが、その証明力を増す間接の証拠となると考えられる。

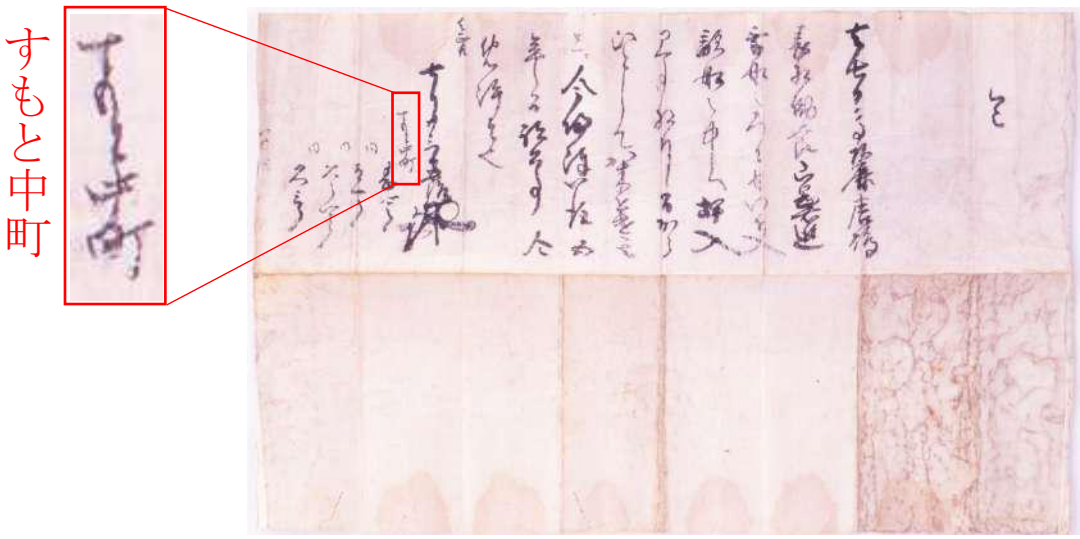


図 3-17 洲本中町甚四郎外宛　脇坂安治感状（個人蔵）（一部補足）

③蜂須賀時代

由良成山城を拠点としていた蜂須賀氏は、寛永８年（1631）から寛永 12 年（1635）にかけて、城や武家屋敷・町屋・寺院等を洲本に移す「由良引け」を実施した。その理由は、由良成山城の建造物の荒廃と、淡路の行政の中心としては地理的位置が片寄りすぎており、陸上交通が不便であったこと考えられる。その結果、幕府の許可を得て洲本に移転することとなった。そして、新たに外町が建設され、内町の一部が改変されたと考えられる。

外町とは、南に曲田山、東に外堀、北に塩屋川、西を物部川で囲まれた区域である。前述の内町とは、中堀にかけられた「農人橋」と「内枡形」で繋がっている。また外町と城下町外には「塩屋口」「物部口」「上物部口」があった。

外町の特徴は３つある。

一つ目は、町割を内町とは異なり、北北西方向を主軸とし、碁盤の目状に町割がなされていることである。つまり、内町とは異なり、「横町型」として形成させている。この際、内町は町屋を中心に横町として改修されたと考えられる。

二つ目は、大手道（物部口から内町の枡形に向かって東に延びる街路）が、内町に真っ直ぐに入ることはできず、折れ曲がっていることである。これは、内町同様の市街戦を想定し、敵が真っ直ぐに城へ突進するのを防ぐためである。

三つ目は、外町の大手町沿いに町屋を配置し、南と北には武家屋敷、西には足軽屋敷（鉄炮町）と由良から移転させた寺町を配置していることである。これは、城下町防衛の役割を持たせたものであった。

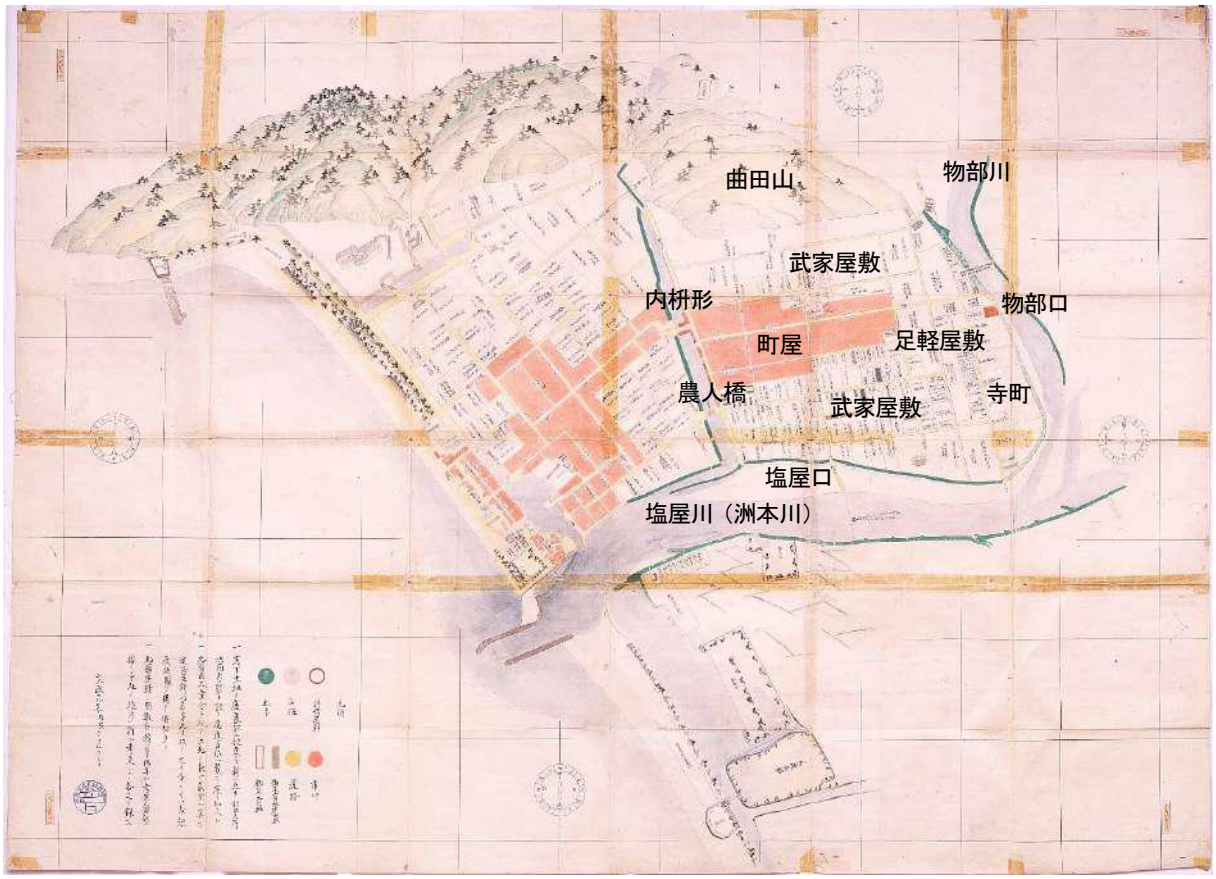


図 3-18 洲本御城下絵図（文政元年）（一部補足）

２）主な歴史的要素

洲本城城下町には、現在も街路や建造物をはじめ、多数の城郭関連施設等が残っている。以下に、城郭関連施設等の位置を示し、次頁からそれぞれの概要について述べていく。

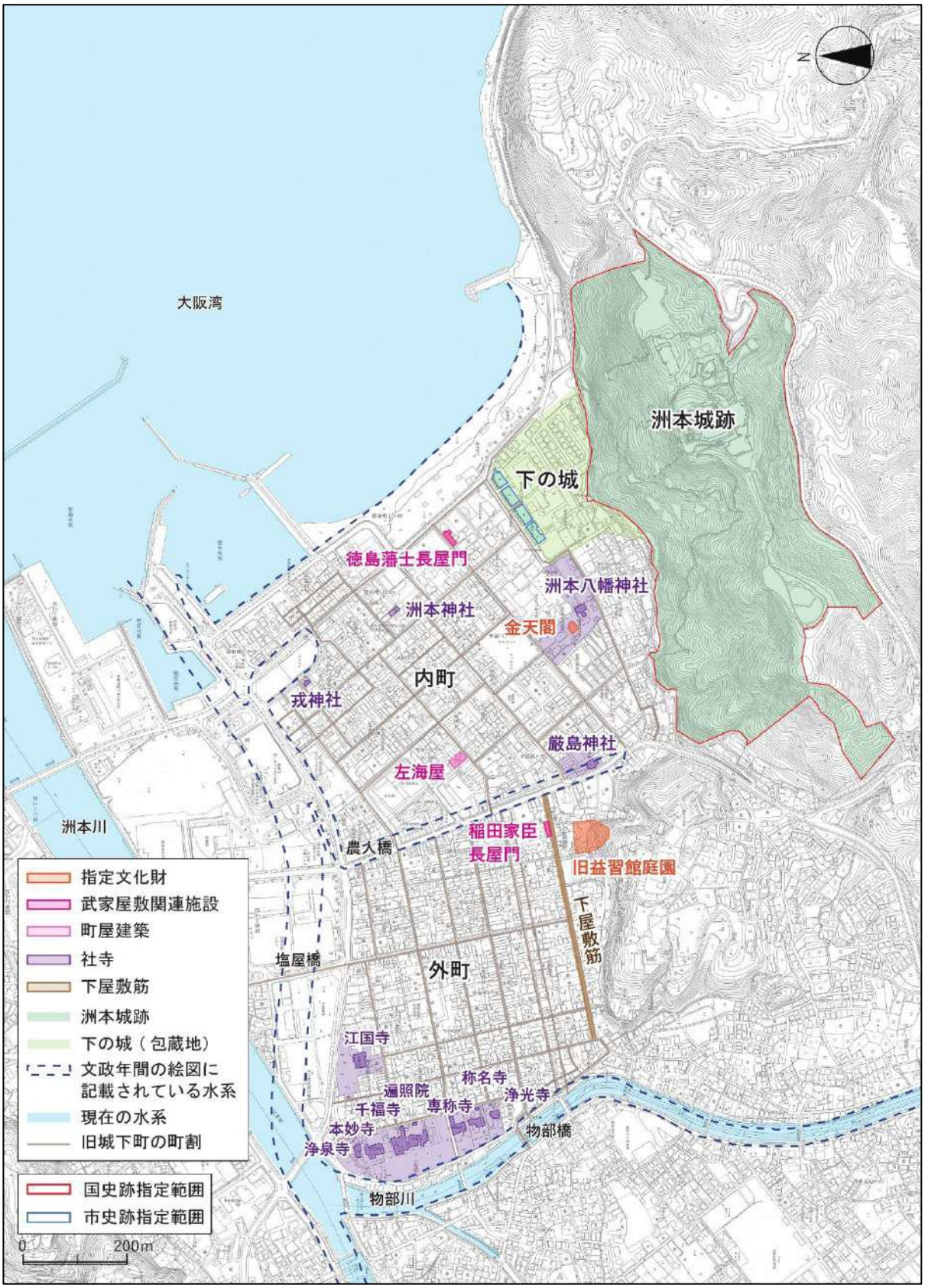


図 3-19 城郭関連施設等位置図

①指定文化財

兵庫県指定重要有形文化財　金天閣

寛永 18 年（1641）徳島藩主蜂須賀忠英が三熊山北麓の洲本城内に建てたと伝えられている。江戸時代初期の書院造の貴重な一例である。

明治以後の数度にわたる移築の中で、改変の跡も見られるが、内部はほぼ当初のままである。床、脇床、書院構、納戸構（帳台）を構え、黒漆塗の折り上げ格天井に金箔が貼られてることから「金天閣」と呼ばれている。

納戸構や違棚に打たれた蜂須賀家紋入の飾金具並びに間仕切欄間の意匠彫刻は、江戸時代初期の特徴をよく示しており、県下に遺存する数少ない殿舎建築として貴重である。

寛永 18 年(1641)	蜂須賀氏の迎賓館として建てられる
明治元年（1868）	稲田九郎兵衛向屋敷に移転する
明治 9 年（1876）	兵庫県が管理する
明治 36 年(1903)	津名郡・三原郡組合淡路高等女学校の作法室となる
大正 14 年(1925)	洲本八幡神社境内に移転する
昭和 8 年（1933）	洲本八幡神社に委譲される
昭和 58 年(1983)	洲本市の文化財に指定となる
昭和 59 年(1984)	兵庫県の文化財に指定となる

写真 3-12 唐破風の式台（向拝）

写真 3-13 正面

写真 3-14 土間庇

写真 3-15 金天閣内部

国指定名勝　旧益習館庭園

稲田氏別荘の庭園である。嘉永７年（1854）、稲田氏の私塾学問所をこの地に移し「益習館」と呼ばれるようになる。庭園は、和泉砂岩の岩山である曲田山を背景に作庭されている。この場所は、外町造成の際の石切場であったと考えられており、矢穴の入った巨岩が多数存在している。また、池泉山側護岸の石組には、高さ 4mを超える日本最大級の巨岩を巧みに活かして作庭されている。平成 28 年（2016）の発掘調査より、明治末から大正期にかけて大規模な改修がなされていることが判明した。その後、平成 31 年（2019）２月 26 日、淡路島の庭園では初となる国名勝の指定を受けている。

写真 3-16 庭園の巨岩

写真 3-17　庭園の様子

写真 3-18　矢穴の残る岩

②街路

現在の城下町は、一部掘が埋め立てられ道路に変更されたところもあるが、基本的な町割を踏襲している。また、旧益習館庭園のある下屋敷筋は、稲田家臣の屋敷が並び、その屋敷ごとに庭園があったといわれ、全国的にも珍しい庭園群が現在も数庭残っている。

写真 3-19　内町　南北にのびる街路

写真 3-20 外町　東西にのびる街路

③寺町

今は栄町と地名が変わったが、もと「寺町」は寛永８年（1631）からの由良引けにより外町の物部川沿いに寺院を集めて外郭防御線とした地域である。

写真 3-21 寺町の様子

写真 3-22 寺町の看板

本妙寺

『味地草』には、津名郡釜口村（淡路市釜口）妙勝寺の本妙坊と称し、同村にあったが、室町時代には、由良四丁目に移り、寛永 8 年（1631）洲本に移ったと書かれている。法華経寺院で、350 年ほど前に建てられた楼門と本堂がある。

写真 3-23　本妙寺の楼門

写真 3-24　本妙寺の本堂

千福寺

慶長年間（1596-1615）に領主池田忠雄が安置させ、祈祷所としたことに始まるとされる。本堂の愛染堂はもと由良四丁目にあり、寛永 11 年（1634）に現在の位置へ移築された。

写真 3-25　千福寺の門

写真 3-26　千福寺の本殿

遍照院（へんじょういん）

大正 5 年（1916）に青蓮寺と地蔵寺が合併し「遍照院」となる。旧地蔵寺は寛永 8 年（1631）由良四丁目から洲本へ移り、旧青蓮寺は先山から由良浦に移り「安楽坊」と号したが、寛永 8 年（1631）に洲本に移ったとされる。

写真 3-27　遍照院の門

写真 3-28　遍照院の本堂

専称寺

『味地草』によると、寛永 8 年（1631）に由良浦四丁目から洲本馬場町に移り、延宝元年（1673）に寺町に移ったとされている。寛政 8 年（1796）2 月 17 日に焼失したが、文化年中（1804-1817）に再建された。「庚午志士の碑」が設置されている。これは、庚午事変の事後処理のうち、切腹や遠島・入牢中に死亡した徳島藩士 22 名を追悼する碑であり、裏面に名前が刻まれている。

写真 3-29　専称寺の本堂

写真 3-30　庚午志士の碑

称名寺

『味地草』には、「苦木」（洲本バスターミナルの裏手付近）にあり「藤の寺」と呼ばれていたと記載されている。元亀年中（1570-1572）に由良四丁目に移り、寛永 8 年（1631）再び洲本に移ったとされる。

写真 3-31　称名寺の門

浄光寺

旧名を勝宝寺といい、『味地草』には通町一丁目（本町一丁目、旧内町通一丁目）にあったが、のちに由良浦四丁目に移り、寛永 8 年（1631）また洲本に移ったとされる。

写真 3-32　浄光寺の門

江国寺（こうこくじ）

臨済宗妙心寺派に属し、徳島藩筆頭家老稲田家の菩提寺である。本堂の小屋裏の棟札から、寛永 17 年（1640）に建てられたことが判明している。裏手の墓地には、稲田氏代々の墓碑群や家臣の墓がある。

写真 3-33　江国寺の門

写真 3-34　江国寺の本堂

写真 3-35　稲田氏の墓

④神社建築

洲本八幡神社

創立月日は不詳であるが、平成 2 年（1990）に本殿宝物庫から発見された「縁起絵巻」によると、最初の記述は承保元年（1074）で、その後寛元 2 年（1244）、元亀 2 年（1571）、天和 4 年（1684）に書き加えられている。

洲本神社（洲本大明神）

寛永年間（1628-1644）、現在地に建立されたといわれている。

戎神社（事代主神社）

中備（なかぞなえ）は蟇股（かえるまた）のかわりに波間に泳ぐ魚をあしらった透彫彫刻で飾られ、向拝頭貫・組物・手狭ともに彩色し、意匠がよく、桃山様式を伝える作品がある。

厳島神社

創立月日は不詳であるが、平成 2 年（1990）に不審火により社殿が全焼し、現在の厳島神社は平成 4 年（1992）に建てられたものである。建築様式は権現造りである。境内には、徳島藩筆頭家老稲田家ゆかりの「稲基神社」がある。これは、もともと洲本市宇山にあったが、北海道移住の際に静内に移し、その御分霊を厳島神社内に迎えたものである。

写真 3-36　洲本八幡神社

写真 3-37　厳島神社　弁天祭の様子

⑤武家屋敷

徳島藩士長屋門

下の城の表門・堀前に設けられた重臣屋敷の中にあり、徳島藩勘定方を務めていたとされている藩士の長屋門である。改築時に板札墨書が見つかり、天明７年（1787）大工長兵衛により建てられたことが判明した。

稲田家臣長屋門

外町地区の下屋敷筋にある長屋門である。ガレージの上に持ち上げて改築されたが、旧状にならって復元している。

写真 3-38 徳島藩士長屋門

写真 3-39 稲田家臣長屋門

⑥町屋建築

左海屋

万治元年(1658)に創業し､酒･醤油醸造を営んだ蜂須賀氏の御用商人の建物である｡寛永４年(1627)に建てられる。中庭にも井戸があり、周囲の倉庫は車庫に改築されたが、町家まわりに広くとった店構えがわかる。また右隣に一段低い二階建ての建物が接続して残っており、江戸時代以降の景観をよくとどめている。軒平瓦には「滴水瓦」が使用されている。

写真 3-40 左海屋

写真 3-41 左海屋の滴水瓦

４.洲本城の縄張り

（１）縄張り

現在残る洲本城の縄張りは、脇坂期のものである。天守台のある本丸を中心に、南側に南の丸、東側に東の丸があり、これが主郭部となっている。東の丸東側には武者溜、南側には馬屋、南の丸の西側には籾蔵、さらに西には西の丸があり、そのほとんどが石垣で囲われている。

建物については、絵図が残っていないため不明であるが、これまでの石垣修復に伴う発掘調査で多量の瓦が出土していることから、各曲輪に建物があったことは間違いない。

北の山裾にも城があり、山上の城「上の城」とは区別され、「下の城」と呼び分けられている。また、下の城と上の城を結ぶ２条の登り石垣が城をより強固にしており、洲本城最大の特徴となっている。下の城から伸びる２条の登り石垣を追うと、本丸、東の丸に連結する。ここから南側の南の丸まで辿ると外郭が高石垣で囲われており、前述した主郭部となる。武者溜、西の丸、馬屋は、主郭部を補う曲輪と考えられる。

なお、各曲輪の名称については、『史跡洲本城跡保存管理計画策定報告書』に基づくものであるが、これは安政４年（1857）に著された『味地草』に表記されているものを主に採用している。

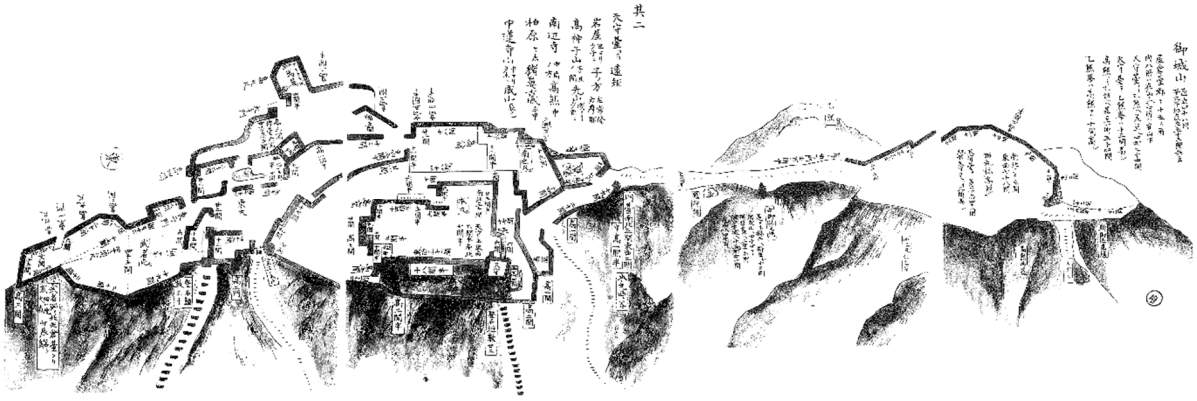


図 3-20 洲本城縄張り図（『味地草』より）

１）本丸

洲本城の中央北側に位置する。曲輪は正方形型のプランとなっており、南と北西側に２箇所の虎口がある。南側は食違（くいちがい）の内枡形虎口（うちますがたこぐち）で大手口となり、北西側の食違虎口は搦手（からめて）口になる。本丸北側は、西に天守台、東に小天守台があり連結式となっている。洲本城は、建物が描かれた絵図が現在１枚も確認されていない。従って、天守をはじめ各曲輪にどのような建物があったかは不明である。天守も想像の域を出ないが、天守台周辺から多量の瓦が確認されることから、天守があった可能性は十分に考えられる。天守台の石垣は、平均約 7.0mと高く、ほぼ完成された算木積みにより築かれており、建物の重量を十分に意識していることがうかがえる。

また、本丸外周の石垣天端からも、瓦が多量に確認されることから、本丸は多門櫓により囲われていた可能性が高い。東面の中央は出隅になっており、横矢がかかるようになっている。

本丸の東側は山里郭と呼ばれる平地があり、脇坂時代の洲本城といわれる「城絵図」（国文学研究資料館蔵　蜂須賀家文書 1220）（ｐ41 図 3-9）には「中務母義」と記されており、脇坂安治の母の館跡と解することができる。

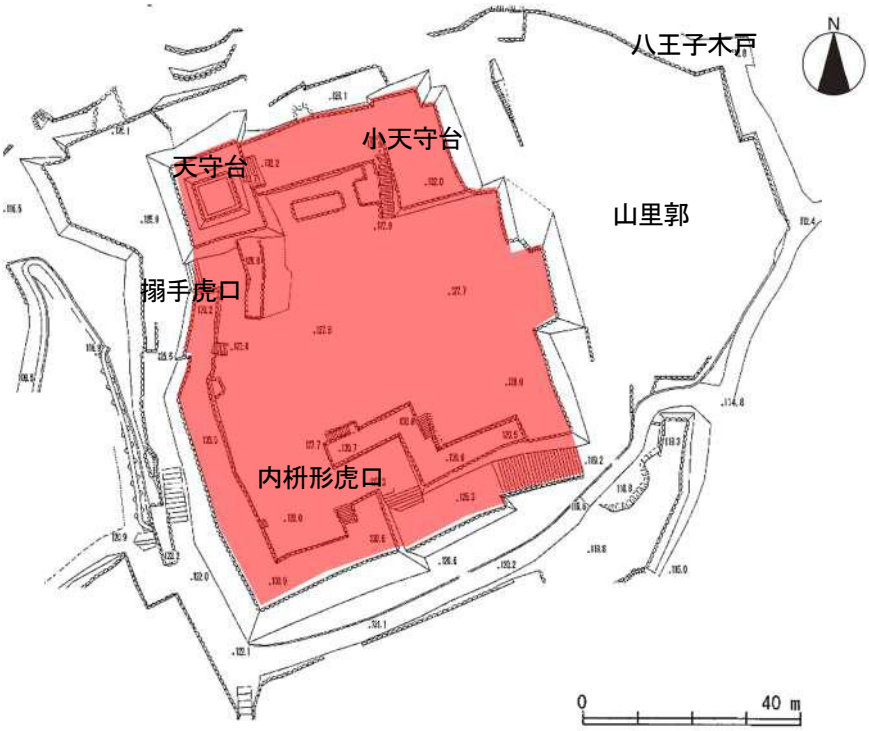


図 3-21 本丸

写真 3-42 天守台

写真 3-43 本丸東側

２）南の丸

本丸南側の通路を挟んだ南に位置する。南の丸は、地形に即した形状だが、東西で２つに区画される。東側は本丸より 6.0m程低い。西側は 4.0m程低い。従って東西で 2.0mの高低差がある。東側の南東隅は櫓台跡があり、櫓台跡の東面石垣には明確な増築痕跡が認められる。本丸南に位置する主郭部のひとつで、南側の主郭部外周は平均約 4.0mの石垣が築かれており、主郭部の東西北面と比較すると高さはそれほどないが、主郭部南側を守る曲輪としての機能を有している。

南の丸西側には、籾蔵と呼ばれる曲輪があり、周囲は土塁により囲われている。また更に西側には西門があり、洲本城では数少ない外枡形の虎口である。

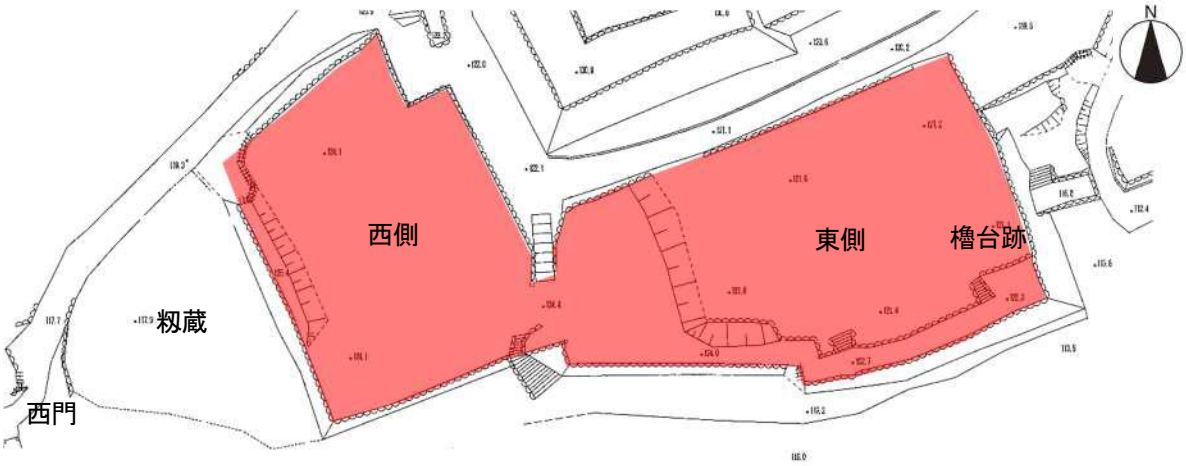


図 3-22　南の丸

写真 3-44　南の丸隅櫓台

写真 3-45　南の丸（本丸より）

３）東の丸

東の丸は、南北で２つに分かれる。北側が二段郭と呼ばれる曲輪で、大きく２段に分かれる。南は日月池を中心に小曲輪群がある。この南北２つの曲輪は、性格が大きく異なるため、本来一括りにするものではない。主郭部の東側に位置し、東側中央には東二の門と呼ばれる曲輪で唯一の枡形虎口がある。

二段郭は、完全に独立した曲輪で、この南側付近から室町後期の遺物が採集されていることから、脇坂期以前の安宅氏時代の洲本城に関係する可能性が考えられる。

水の手郭は、籠城戦に必要不可欠な曲輪で、日月池南側の石垣を強固に築いていると考えられる。石垣修復時に、解体石垣の奥から石垣が確認されたことも、それを裏付けている。

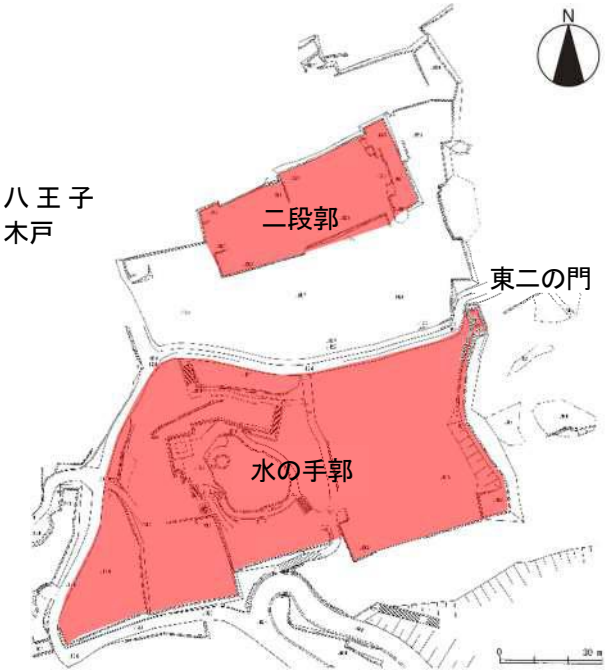


図 3-23　東の丸

写真 3-46　東の丸二段郭石垣

写真 3-47 東の丸水の手郭

４）武者溜

洲本城の東の端に位置する。山上の曲輪の中では最大の規模を誇る。主郭部を補完する役割が考えられ、曲輪東側には、「東一の門」と呼ばれる城への出入り口がある。この曲輪は、ほとんどの地表面に岩盤が確認される。そのためか建物の痕跡は今まで確認されていない。兵の駐屯所であったか、若しくは有事の際に領民が避難する場所であった可能性も考えられる。

曲輪南側は比較的緩斜面になっているが、北側は、本丸、東の丸同様に急斜面で、数条の竪堀や犬走も確認されている。

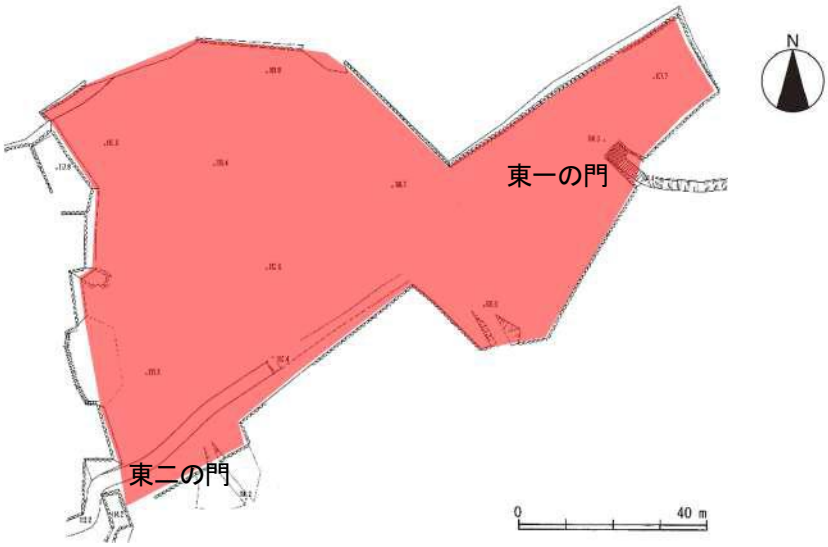


図 3-24 武者溜

写真 3-48 武者溜

写真 3-49 武者溜北斜面の犬走

５）馬屋

東の丸の南に位置する。洲本城の最南部に位置し、舌状に張り出した自然の地形を活かした形状となっている。実際に馬屋としての役割を果たしていたかは不明である。北側には大手門といわれる場所があり、西門（南の丸）と同様に洲本城ではめずらしい外枡形の虎口である。「城絵図」では、大手門は閉ざされており、城への出入り口は東一の門（武者溜）、西門（南の丸）、搦手口（本丸）、八王子木戸（東の丸）となっている。

虎口２は､南側の乙熊山との間の谷筋に下るルートと思われるが､明確な登城ルートは不明である。

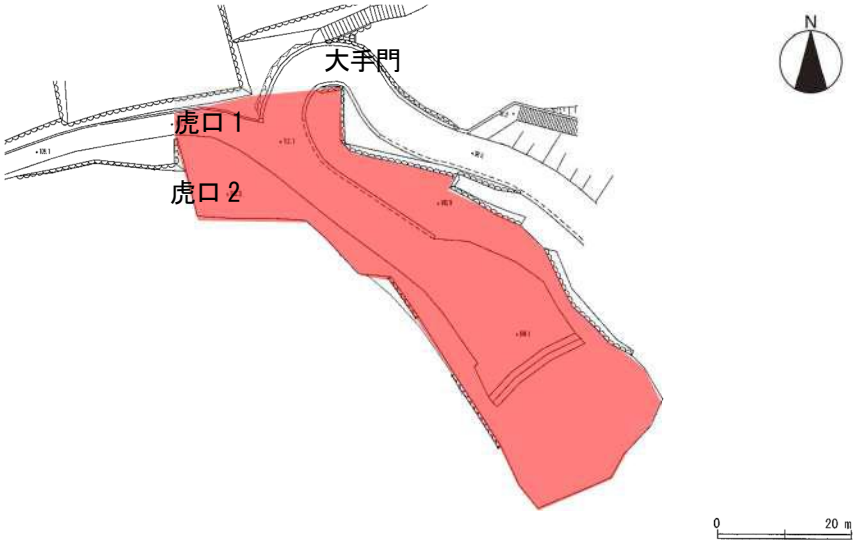


図 3-25 馬屋

写真 3-50 馬屋

写真 3-51 大手門正面

６）西の丸

西門（南の丸）から約 200m西側に位置する。曲輪の主に南面に石垣が築かれており、北側は岩盤で急斜面になっており、岩盤を利用した曲輪の形状となっている。南の石垣のさらに南側には、畝状竪堀らしきものが確認されることから、南側の緩斜面からの攻撃を意識したものと思われる。

築石は、比較的大きなものが使用されている。主郭部から離れているにもかかわらず、多角形に積まれた石垣は非常に重厚である。これは、この地が石切場跡であったため、石材搬入が容易であったことがその要因と思われる。

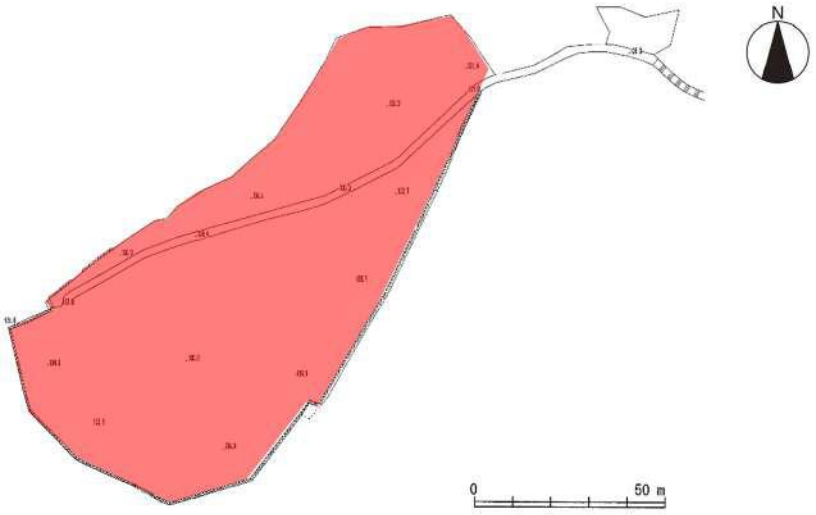


図 3-26 西の丸

写真 3-52 西の丸石垣

写真 3-53 西の丸

７）古屋敷

下の城の北西、北斜面の山腹に位置する。小曲輪群が石垣によって区画されている。山上の石垣が脇坂期のものであることから、この曲輪も安宅・仙石期ではなく、脇坂期の家臣団の屋敷と考えられる。しかし、西登り石垣が古屋敷の一部を取り込む形で築かれていることから、登り石垣築造以前の脇坂初期段階のものと考えられる。

写真 3-54 古屋敷石垣

写真 3-55 古屋敷

８）下の城

山上の北麓に位置する。曲輪の石垣前面に堀があり、石垣によって囲われている。現在の堀及び石垣は、寛永８年（1631）以降の蜂須賀氏によるものである。脇坂期は、「城絵図」（ｐ57　図 3-16）によると山上の東西登り石垣が下の城の東西の石垣に繋がり、山上の主郭部と一体化している。また正面の虎口は、外枡形虎口で入って左に折れるように描かれているが、蜂須賀氏の段階で石垣は直線になり、内枡形で右に折れるようになっている。

写真 3-56 下の城石垣

写真 3-57 下の城

（２）石垣

１）石材

石垣の石材は、三熊山が和泉砂岩の岩山であるため、概ね現地調達で築かれている。中には、花崗岩の転用石や沼島（南あわじ市沼島）等で産出される緑泥片岩がごく一部に使用されているが、後世の所産と考えられる場所で、脇坂期については和泉砂岩で築かれている。ただし、東の登り石垣の下半分については、花崗岩で積まれている。この花崗岩は、洲本川北側にある石ヶ谷と呼ばれる採石場で採られた石材である。寛永期の下の城の石垣についてもこの花崗岩が用いられている。

赤色立体地図（図 3-27）を見ると、西の丸内に複数の穴が確認できる。これは現地でも確認される穴で、石切場の痕跡と考えられる。

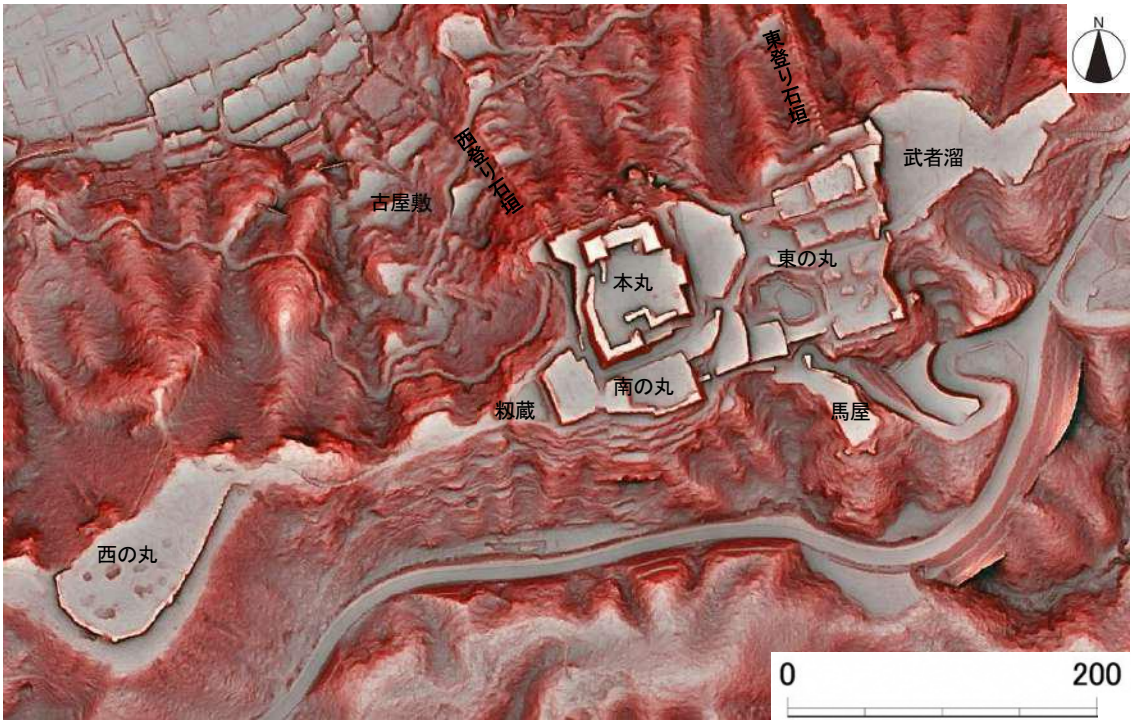


図 3-27 洲本城跡　赤色立体地図

２）矢穴

洲本城の石垣には、石切の際の矢穴が確認される。矢穴の残る築石のほとんどは、隅角部において確認される。各曲輪から計測した 109 の矢穴を平均すると、上端４寸７分、下端３寸５分、深さ２寸９分である。洲本城下の城である寛永期の矢穴の平均値は、上端２寸８分、下端２寸２分、深さ２寸２分、幕末の台場跡である炬口台場（洲本市炬口）の矢穴の平均値は、上端１寸８分、下端１寸２分、深さ１寸４分となり、時代が下るに従い小型化していく（図 3-28）。

本丸の矢穴については、その他の矢穴と比較すると、上端と下端の差が少ない。上端と下端の平均差は、本丸で１寸１分６厘、本丸周辺の主郭部は１寸４分５厘、その他の曲輪は１寸１分８厘である。

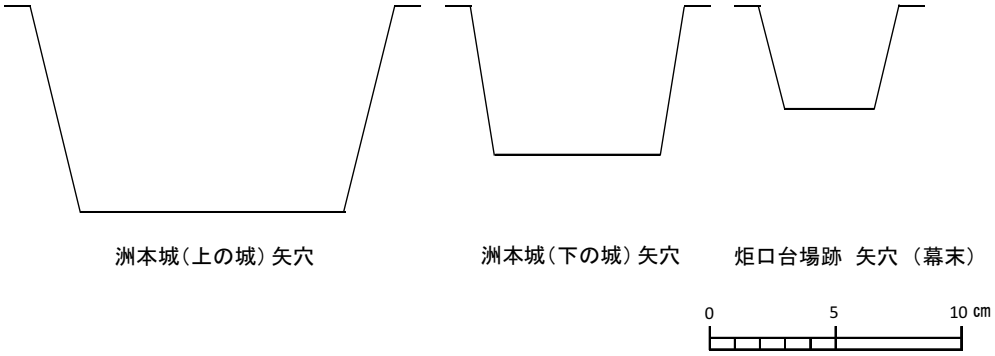


図 3-28 矢穴断面図（『旧益習館庭園調査報告書』一部改変）

写真 3-58 本丸小天守台の矢穴

写真 3-59 西の丸の残念石

３）スダレ状ノミ痕

洲本城には、ノミで面加工されたスダレ状のノミ痕が残る築石が確認できる。この目的は、隅角部及び築石面の整形にある。この技術は戦国期には見られないもので、織豊期より見られるものである。全国的には慶長５年（1600）以後によるものが多い。

洲本城では各所に確認され、武者溜の１箇所を除いて隅角部の上部に集中して確認され、概ね片面にその痕跡が認められる。両面にあるものもあるが、ごく一部に留まっている。曲輪別にみると、特に本丸、東の丸に多く見られ、西の丸は１箇所、南の丸については確認されない。

洲本城のノミ痕部分については、全国的な流れ同様、慶長５年（1600）以後に築かれた可能性が高い。しかし洲本城は、文禄５年（1596）の慶長伏見地震で大きな被害を受けたことが、『十六・十七世

紀イエズス会日本報告集』に残されている。建物は勿論、石垣についても被害があったことが想定され、被災箇所の修復が行われたと考えられる。被災箇所を修復しながら本格的な普請が行われたと考えられる。それは、慶長５年（1600）以後も引き続き行われ、その中で隅角部についてはスダレ状ノミ痕により整形された築石が積まれたと考えられる。

写真 3-60 本丸大手口のノミ痕

写真 3-61 東一の門のノミ痕

４）登り石垣

洲本城の登り石垣は、東西２条築かれている。

東登り石垣は、下の城の東面石垣（取り壊されて残存していない）の山裾から、東の丸の高石垣付近に繋がっている。三熊山の北斜面は非常に急峻なため、登り石垣は階段状になっている。登り石垣外（東）側には洲本城最大の竪堀が走る。登り石垣と竪堀との間には、土止めの石垣が施されている箇所がある。登り石垣に使用されている築石は、主郭部に使用されたものと比べると非常に小さく、面の大きさは30～50㎝程度のものが多く見られる。隅石は算木になっているものとなっていないものが混在している。また、主郭部隅石に多数見られる矢穴が、東登り石垣には見られない。東登り石垣の内、中腹より下の石垣は、和泉砂岩ではなく花崗岩で積まれている。中腹は、花崗岩と和泉砂岩が混在した石垣で、麓に下るほど花崗岩の割合が多くなり、最後は殆どが花崗岩を用いて積まれている。この花崗岩は、洲本城北側の洲本川を約2㎞北へ上がった「石ヶ谷」と呼ばれるところから採石されたもので、蜂須賀時代の洲本城（下の城）の石垣にも使用されている。花崗岩の中には、玉石で積まれている石垣もある。そのため非常に脆く、一部は崩落している。脇坂期の石垣は、極僅かな転用石を除くと、そのほとんどが三熊山の和泉砂岩・礫岩で積まれている。花崗岩は西登り石垣でも見られないものである。

西登り石垣は、下の城西側石垣（取り壊されて残存していない）から本丸天守台に繋がっている。東登り石垣同様、階段状になっている。ただ、東登り石垣のような花崗岩は使用されておらず、全て和泉砂岩で積まれている。また、東登り石垣では見られない矢穴を持つ築石が数石確認できる。登り石垣西側には、「古屋敷」と呼ばれる曲輪群が存在する。この古屋敷は、脇坂家臣団の居住地と考えられ、登り石垣周辺に広がっていたと思われる。登り石垣は、この古屋敷の曲輪を取り込む形で築かれており、その平坦面は少なくとも4箇所以上確認できる。脇坂初期段階で築かれた古屋敷が、文禄の役以降に登り石垣が築かれた際に一部を登り石垣として利用したと考えられるが、家臣の屋敷が取り壊されて登り石垣となったのか、家臣の屋敷と登り石垣が併存していたかは不明である。また、古屋敷の築石と比べ、東登り石垣同様に比較的小さな築石が使用されている。そして、平坦面の西側がほぼ一直線上に築かれていることから、少なくとも古屋敷の石垣をそのまま利用したのではなく、登り

石垣用に西側を改修したと考えられる。

写真 3-62 西登り石垣

写真 3-63 東登り石垣

５. 関連事業

（１）発掘調査

洲本城跡における発掘調査は、史跡指定前後で大きく分かれる。指定以前は、開発等に伴う発掘調査で、指定後は石垣修復に係る発掘調査が主になる。表 3-2 に発掘調査の一覧を示し、発掘調査実施箇所を図 3-29 に示した。

表 3-2 発掘調査一覧

No.	調査年度	調査場所	面積㎡	内　容	備考
①	昭和 54 年（1979）	武者溜	—	洲本測候所庁舎建替に伴う	調査面積不明
②	平成 4 年　（1992）	東の丸水の手郭	215.0	日月池周辺整備に伴う	
③	平成 7 年　（1995）	南の丸	—	側溝敷設工事に伴う	調査面積不明
④	平成 8 年　（1996）	北側山腹	10.0	遊歩道の真砂土舗装に伴う	
⑤		北側山腹	90.0	治山工事に伴う	
⑥		北側山腹	7.6	遊歩道の真砂土舗装に伴う	
⑦	平成 9 年　（1997）	本丸小天守台	1.0	案内板設置に伴う	
⑧	平成 10 年（1998）	南の丸南東隅門	34.8	石垣崩落に伴う	
⑨	平成 16 年（2004）	馬屋	40.0	石垣修復に伴う	国庫補助事業
⑩	平成 17 年（2005）	馬屋	36.0	石垣修復に伴う	国庫補助事業
⑪	平成 19 年（2007）	馬屋	30.0	石垣修復に伴う	国庫補助事業
⑫	平成 20 年（2008）	本丸搦手口	20.0	石垣修復に伴う	国庫補助事業
⑬	平成 21 年（2009）	南の丸東側	45.0	便益施設建築に伴う	国庫補助事業
⑭	平成 22 年（2010）	本丸大手口	20.0	石垣修復に伴う	国庫補助事業
⑮	平成 23 年（2011）	馬屋北側	20.0	石垣修復に伴う	国庫補助事業
⑯	平成 24 年（2012）	南の丸北側	30.0	石垣修復に伴う	国庫補助事業
⑰	平成 25 年（2013）	南の丸	26.0	石段修復に伴う	国庫補助事業
⑱	平成 26 年（2014）	馬屋北側	0.3	石垣修復に伴う	国庫補助事業
⑲	平成 27 年（2015）	南の丸北側	78.0	石垣修復に伴う	国庫補助事業
⑳	平成 28 年（2016）	東の丸水の手郭	42.0	石垣修復に伴う	国庫補助事業
㉑	平成 29 年（2017）	本丸東側（山里郭）	54.0	石垣修復に伴う	国庫補助事業

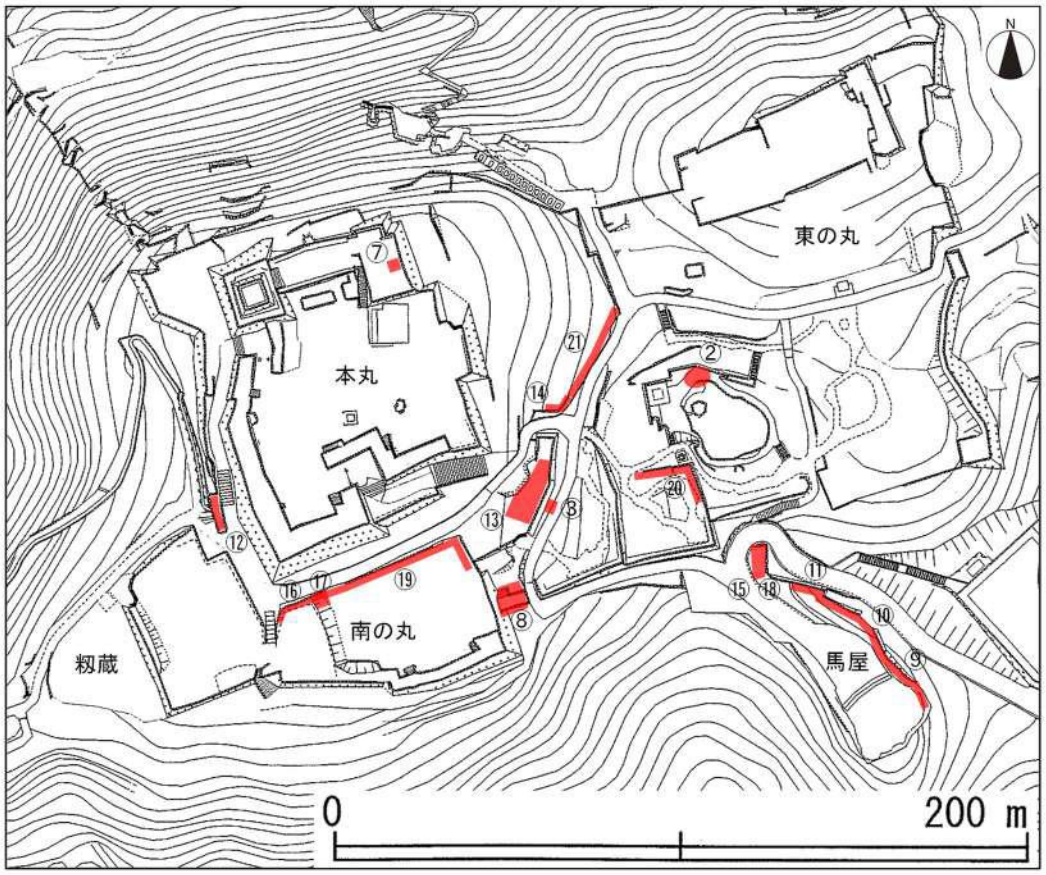


図 3-29 発掘調査実施箇所

写真⑪ 平成 19 年 馬屋

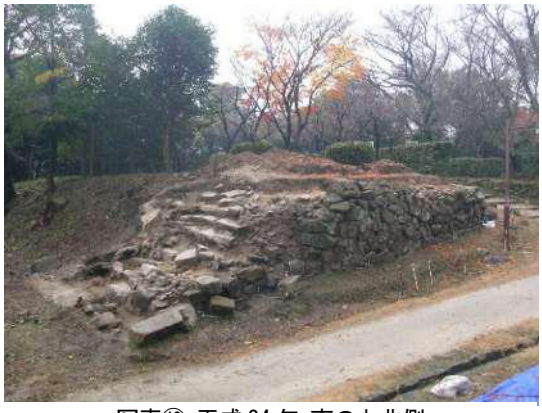
写真⑫ 平成 20 年 本丸搦手口

写真⑬ 平成 21 年 南の丸東側

写真⑭ 平成 22 年 本丸大手口

写真⑮ 平成 23 年 馬屋北側

写真⑮ 平成 23 年 馬屋北側



写真⑯ 平成 24 年 南の丸北側

写真⑯ 平成 24 年 南の丸北側

写真⑱ 平成 26 年 馬屋北側

写真⑲ 平成 27 年 南の丸北側

写真⑳ 平成 28 年 東の丸水の手郭

写真㉑ 平成 29 年 本丸東側（山里郭）

（２）石垣修復事業

史跡指定以前には、昭和 53 年（1978）に下の城の石垣修復、昭和 59 年（1984）に東の丸水の手郭や南の丸東側等の石垣修復を行った。また、平成 7 年（1995）の阪神・淡路大震災の影響による石垣の緩みから生じた、翌年の豪雨被害による石垣崩落のため、南の丸南東隅櫓門跡の虎口石垣、東の丸水の手郭南側石垣、本丸南側の石垣修復等を行った。

その後、平成 11 年（1999）に国の指定を受け、平成 14 年（2002）に保存管理計画を策定し、平成 16 年（2004）より石垣修復を主とした整備事業を開始した。

表 3-3 石垣修復箇所一覧

No.	修復年度	修復場所	面積㎡	内　容	備考
①	昭和 53 年（1978）	下の城	35.0	積直し	
②	昭和 59 年（1984）	東の丸水の手郭	128.0	積直し	
③	昭和 60 年（1985）	東の丸水の手郭	160.8	積直し	
④		南の丸東側	73.5	積直し	
⑤		本丸大手口	6.2	積直し	
⑥		本丸大石段	—	下段部新設	
⑦	平成 12 年（2000）	南の丸南東隅櫓門跡	45.0	積直し	阪神・淡路大震災の影響による
⑧		本丸南側	22.3	積直し	上記同理由
⑨		東の丸水の手郭	73.2	積直し	上記同理由
⑩		東の丸水の手郭	—	養生のみ（H28・29 に修復）	上記同理由
⑪		西門	—	養生のみ	上記同理由
⑫	平成 16 年（2004）	馬屋	70.0	積直し	国庫補助事業
⑬	平成 18 年（2006）	馬屋	35.0	積直し	国庫補助事業
⑭	平成 19 年（2007）	馬屋	24.0	積直し	国庫補助事業
⑮	平成 21 年（2009）	本丸搦手口	50.0	積直し	国庫補助事業
⑯	平成 22 年（2010）	本丸大手口	25.0	積直し	国庫補助事業
⑰	平成 23 年（2011）	馬屋北側	25.0	積直し	国庫補助事業
⑱	平成 24 年（2012）	南の丸北側	23.0	積直し	国庫補助事業
⑲	平成 25 年（2013）	南の丸北側	14.0	積直し	国庫補助事業
⑳	平成 26 年（2014）	南の丸北側石段 馬屋北側	42.0	南の丸：石段修復 馬屋：石垣復元	国庫補助事業
㉑	平成 27 年（2015）	南の丸北側	21.0	積直し	国庫補助事業
㉒	平成 28 年（2016）	東の丸水の手郭	25.0	積直し	国庫補助事業
㉓	平成 29 年（2017）	東の丸水の手郭	22.0	積直し	国庫補助事業
㉔	平成 30 年（2018）	本丸東側（山里郭）	—	土のう養生	国庫補助事業

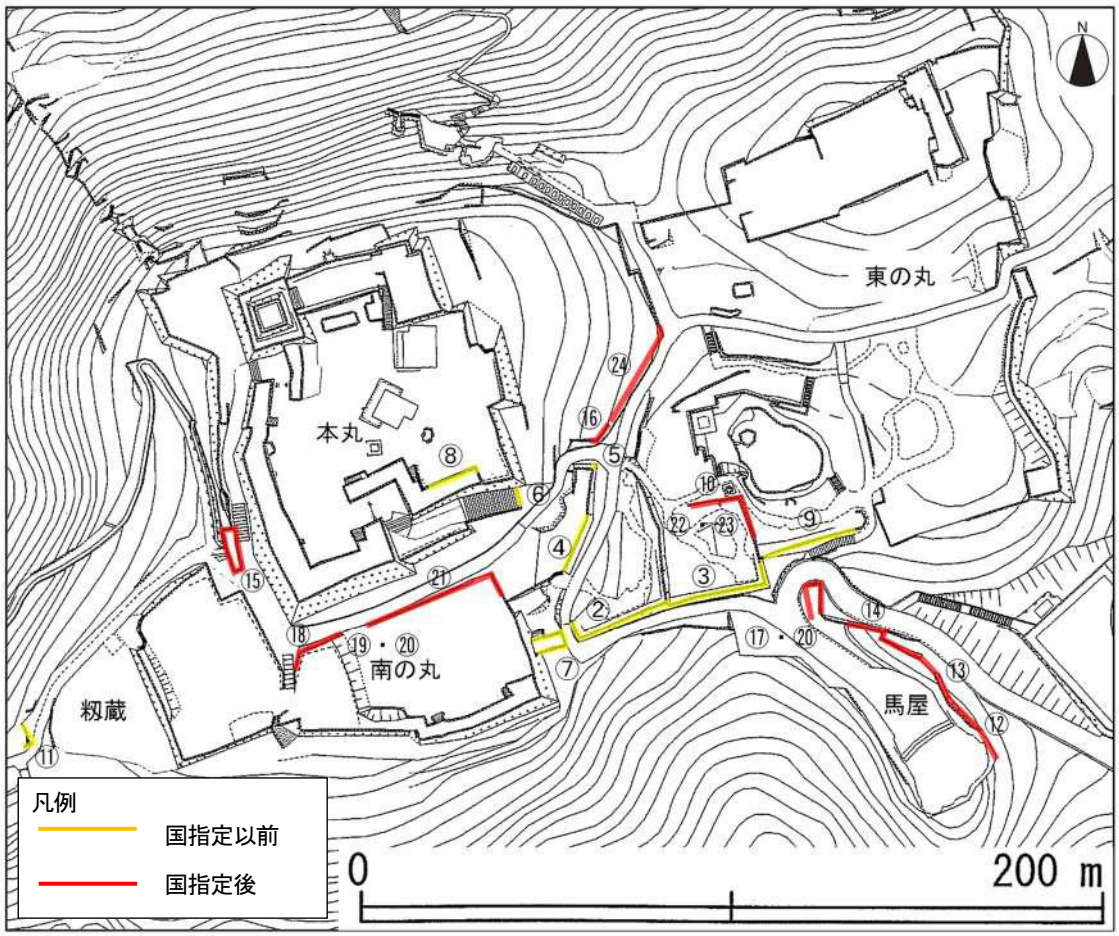


図 3-30 石垣修復実施箇所

写真② 昭和 59 年　東の丸水の手郭（修復前）

写真② 昭和 59 年　東の丸水の手郭（修復後）

写真② 昭和 59 年　東の丸水の手郭（積直し）

写真② 昭和 59 年　東の丸水の手郭（足場）

写真③ 昭和 60 年　東の丸水の手郭（修復前）

写真③ 昭和 60 年　東の丸水の手郭（修復後）

写真④ 昭和 60 年　南の丸東側（修復前）

写真④ 昭和 60 年　南の丸東側（修復後）

写真⑤ 昭和 60 年　本丸大手口（修復前）

写真⑤ 昭和 60 年　本丸大手口（修復後）

写真⑥ 昭和 60 年　本丸大石段（修復前）

写真⑥ 昭和 60 年　本丸大石段（修復後）

写真⑦ 平成 12 年　南の丸南東隅櫓門跡（修復前）

写真⑦ 平成 12 年　南の丸南東隅櫓門跡（修復後）

写真⑨ 平成 12 年　東の丸水の手郭（修復前）

写真⑨ 平成 12 年　東の丸水の手郭（修復後）

写真⑯ 平成 22 年　本丸大手口(修復前)

写真⑯ 平成 22 年　本丸大手口(修復後)

写真⑰ 平成 23 年　馬屋北側(修復前)

写真⑰　平成 23 年　馬屋北側(修復後)

写真⑱ 平成 24 年　南の丸北側(修復前)

写真⑱ 平成 24 年　南の丸北側(修復後)

写真⑲ 平成 25 年　南の丸北側(修復前)

写真⑲ 平成 25 年　南の丸北側(修復後)

写真⑳ 平成 26 年　南の丸北側石段(修復前)

写真⑳ 平成 26 年　南の丸北側石段(修復後)

写真⑳ 平成 26 年　馬屋北側(修復前)

写真⑳ 平成 26 年　馬屋北側(修復後)

写真㉑ 平成 27 年　南の丸北側(修復前)

写真㉑ 平成 27 年　南の丸北側(修復後)

写真㉒ 平成 28 年　東の丸水の手郭(修復前)

写真㉒ 平成 28 年　東の丸水の手郭(修復後)

写真㉓ 平成 29 年　東の丸水の手郭(修復前)

写真㉓ 平成 29 年　東の丸水の手郭(修復後)

写真㉓ 平成 29 年　東の丸水の手郭(修復前)

写真㉓ 平成 29 年　東の丸水の手郭(修復後)

（３）関連事業一覧

（１）（２）で述べたように、洲本城跡では発掘調査や石垣修復工事の整備事業が行われてきた。以下に、その他事業も含めた洲本城跡で行われてきた関連事業一覧を示す。

表 3-4　洲本城跡関連過年度事業関係

No.	整備年度	整備箇所	整備内容	整備主体	備考
1	昭和４年 (1929)	本丸天守台	昭和天皇御大典記念事業　城型休憩所（模擬天守）	洲本町	
2	昭和 36 年 (1961)	西の丸など			山火事
3	昭和 39 年 (1964)	南の丸南側	植物園	洲本観光株式会社	
4	昭和 48 年 (1973)		広報すもとに洲本城「上の城」「下の城」の表記		
5	昭和 49 年 (1974)	本丸天守台、 東の丸二段郭	・本丸天守台…模擬天守修復工事 ・東の丸二段郭…配水池工事		３月
6	昭和 50 年 (1975)	本丸・馬屋など	桜の植樹（山頂一帯に吉野桜 200 本）	商工観光課	２月
7	昭和 53 年 (1978)	下の城	石垣修復（洲本城址）	商工観光課	
8	昭和 54 年 (1979)	西の丸	休憩所、案内板、張芝、植栽（ヤブツバキ 700 本）	商工観光課	
9		武者溜	洲本測候所庁舎立替えに伴う発掘調査	教育委員会	１月
10	昭和 55 年 (1980)	本丸・西の丸	模擬天守の屋根・壁修理、 西の丸入口のコンクリート舗装		
11		下の城	堀の改修工事	商工観光課	
12	昭和 56 年 (1981)	馬屋	馬屋（月見台）補修工事	商工観光課	
13	昭和 59 年 (1984)	全域	遊歩道路面舗装、擬木手すり、馬屋東側駐車場等	商工観光課	
14		東の丸水の手郭 東側石垣	はらみ・崩落による積直し、本丸大石段下部修復	商工観光課	昭和 60 年度まで
15	昭和 62 年 (1987)	武者溜	洲本測候所資料庫新築工事	大阪管区気象台	12 月
16	昭和 63 年 (1988)	南の丸	梅園整備工事	商工観光課	
17	昭和 60 年代	南の丸東側石垣	はらみ・崩落による積直し	商工観光課	野外遊具、植栽、道標とも
18	平成元年 (1989)	下の城	堀の改修工事	商工観光課	平成２年度まで
19	平成２年 (1990)	北斜面	登山道整備	商工観光課	1～3 月
20		本丸大石段、 本丸南側通路	大石段・虎口階段の修復、 通路側溝設置	商工観光課	11 月～3 月
21	平成３年 (1991)	東の丸水の手郭	日月池改修工事	商工観光課	平成４年度まで
22	平成４年 (1992)	東の丸水の手郭 日月池周辺	日月池周辺整備（日月池の一部埋め立てと東屋整備）に伴う発掘調査（215 ㎡）	商工観光課	８・９月
23	平成７年 (1995)		阪神・淡路大震災により石垣の緩み拡大		１月
24		南の丸	側溝敷設工事に伴う発掘調査（工事は未着工）	教育委員会	３月
25	平成８年 (1996)	三熊山北麓西部	遊歩道の真砂土舗装に伴う発掘調査（10 ㎡）	教育委員会	１月

No.	整備年度	整備箇所	整備内容	整備主体	備考
26	平成 8 年 (1996)	三熊山治山事業	治山工事（兵庫県）に伴う発掘調査 （90 ㎡）、北裾に落石防止柵設置	教育委員会	2 月
27		三熊山北麓西部・虎口	遊歩道の真砂土舗装に伴う発掘調査 （7.6 ㎡）	教育委員会	10 月
28	平成 9 年 (1997)	本丸小天守台	案内板設置に伴う発掘調査（1.0 ㎡）	教育委員会	6 月
29		南の丸南東隅門跡	豪雨災害によりはらみ→後に崩落 阪神・淡路大震災が遠因		9 月
30	平成 10 年 (1998)	南の丸南東隅門跡	石垣崩落に伴う積直しの発掘調査 （34.8 ㎡）	教育委員会	2 月
31	平成 11 年 (1999)	1 月 14 日　国指定			
32	平成 12 年 (2000)	南の丸南東隅門跡、 東の丸水の手郭南側石垣、東の丸水の手郭日月池南側石垣、西門	・南の丸南東隅門跡石垣…積直し ・東の丸水の手郭南側石垣…積直し ・東の丸水の手郭日月池南側石垣…養生のみ ・西門…養生のみ	商工観光課	1～7 月
33	平成 16 年 (2004)	馬屋東側石垣	発掘調査及び石垣修復	教育委員会	国庫補助事業
34	平成 17 年 (2005)	馬屋東側石垣	発掘調査	教育委員会	国庫補助事業
35	平成 18 年 (2006)	馬屋東側石垣	石垣修復	教育委員会	国庫補助事業
36	平成 19 年 (2007)	馬屋東側石垣	石垣修復	教育委員会	国庫補助事業
37	平成 20 年 (2008)	本丸搦手口石垣	発掘調査、石垣解体	教育委員会	国庫補助事業
38	平成 21 年 (2009)	本丸搦手口石垣、 本丸大手口	・本丸搦手口石垣…積直し ・本丸大手口…発掘調査（トイレ新設工事に伴う）	教育委員会	国庫補助事業
39	平成 22 年 (2010)	本丸大手口	発掘調査、石垣修復	教育委員会	国庫補助事業
40	平成 23 年 (2011)	馬屋北側石垣	発掘調査、石垣修復（一部残す）	教育委員会	国庫補助事業
41		本丸	本丸内建物（旧茶店）撤去工事	個人	3 月
42		本丸東側（山里郭）	盛土及び張芝工事、竹垣設置工事	教育委員会	10～2 月
43		本丸大手口	トイレ新設工事	商工観光課	12 月
44	平成 24 年 (2012)	南の丸北側	発掘調査、石垣修復	商工観光課	国庫補助事業
45		本丸、西の丸	本丸・西の丸トイレ撤去工事	商工観光課	2～4 月
46	平成 25 年 (2013)	南の丸北側	石段修復	教育委員会	国庫補助事業
47		本丸天守台	模擬天守修復工事	商工観光課	3～7 月
48		本丸	関西電力木柱入替工事	関西電力	12 月
49	平成 26 年 (2014)	南の丸北側、 馬屋北側石垣	石段修復	教育委員会	国庫補助事業
50		武者溜北面	樹木伐採	環境省	1 月
51	平成 27 年 (2015)	南の丸北面東側石垣	発掘調査、石垣修復	教育委員会	国庫補助事業
52		西の丸、 東の丸二段郭	・西の丸…高架水槽撤去 ・東の丸二段郭…配水池撤去	淡路広域水道企業団	12 月
53	平成 28 年 (2016)	東の丸水の手郭石垣	発掘調査、石垣修復（一部残す）	教育委員会	国庫補助事業
54		三熊山北斜面	樹木伐採	農林水産振興事務所	1 月
55		本丸搦手西側	樹木伐採	商工観光課	10 月

No.	整備年度	整備箇所	整備内容	整備主体	備考
56	平成 29 年 (2017)	東の丸水の手郭石垣、 本丸東側（山里郭）	・東の丸水の手郭石垣…石垣修復 ・本丸東側（山里郭）…発掘調査	教育委員会	国庫補助事業
57		武者溜	洲本測候所撤去工事	大阪管区気象台	12～3 月
58	平成 30 年 (2018)	本丸東側（山里郭）、 本丸搦手口西側石垣	・本丸東側（山里郭）…一部解体、養生 ・本丸搦手口西側石垣…測量、番号付	教育委員会	国庫補助事業
59		東の丸二段郭	樹木伐採	商工観光課	3 月
60		全域	赤色立体地図作成	教育委員会	3 月
61	平成 31 年 令和 元年 (2019)	東の丸二段郭	トイレ撤去工事	商工観光課	7 月

６．模擬天守

（１）建設の発意、計画及び経緯

昭和 4 年（1929）、昭和天皇の御大典記念事業として、眼下に海上を見渡すことができる本丸の天守台に模擬天守が建てられた。確認できた文献では、未公刊の『洲本市誌（草案）下』（昭和 35 年（1960））に、昭和 4 年（1929）5 月 30 日、「御大典記念三熊山城型休憩所竣工」とあるのみで、それ以外の詳細は記されていない。公刊されている『洲本市史』では、年表の中で同年に「洲本城に天守閣、御大典記念としてできる。」と記されている以外の詳細は記載されておらず、文献では模擬天守の建設経緯が明示されていない。

洲本町会議事録には、模擬天守の建設は、洲本町（当時）の昭和 3 年度（1928）の追加予算として 4 千円が計上されたことに始まり、同年 11 月 28 日に開かれた町会で可決されたとあり、町役場で整理している「昭和四年中事務事業報告」では、「御大典記念事業三熊山城型休憩所新設工事一月七日工事に着手五月三十日竣工」とある。なお、「天守閣」という用語は使用されていない。

洲本市立淡路文化史料館には、模擬天守の設計図面（「城山本丸天守閣設計圖」）が所蔵されているが、作成年月日や作成者（設計者）の記載はない。設計図には「天守閣」とあり、設計者には「天守」をイメージした「休憩所」であったと思われる。

（２）建設当時の評価

先述の町会での議論の過程では「城型休憩所」等と呼称され、「天守」としての位置づけはなされていない。しかし未公刊の『洲本町誌稿』（昭和 13 年（1938）12 月）の観光の頁には、「殊に昭和三年城壁を利用して建築さられた三層の天守閣は雲表に聳立ち、・・・・・」と記されている。また建物入口近くにある石板には、「御大礼記念、天守閣、洲本町、昭和参年度建築」という文字が刻まれている。このように観光者を意識して「天守」という語が使用されている。

写真 3-64 入口近くの石板

（３）模擬天守建設の意義

このように当時の文献でも模擬天守の記載には差があり、この建設が地元では大きな出来事として受け止められていなかったのではないかとみられる。大阪と同じ御大典記念事業であり、先行して計画が進む大阪の影響があったと考えられる。ただし洲本では、住民らから広く寄付を集めている様子が伺えず、また計画に対する住民の意向を汲み取る様子も見えない。行政主導で観光用の「城型休憩所」が建設されたのである。

近代建築様式でもあるピロティがあり、伝統的な城郭建築への志向は低い。建築内部での展示・陳列の記録は見当たらず、建物上層部から眼下に「パノラマ」のような市街地を眺める三熊山頂の休憩所兼展望台が機能の中心であった。

（『戦国期城郭の城址に建設された模擬天守の建設経緯と意義―戦前の地方都市における模擬天守の建設に関する研究その 1－』野中勝利　参照）

（４）現在

洲本城跡の模擬天守は、いわゆる「復元」「復興」したものではないが、天守が存在していたと考えられる場所に建てられた現存模擬天守では、日本最古のものである。また洲本市民にとっては、長年にわたって洲本市街地の背景、ランドマーク的存在となっている。

平成 23 年（2011）に一部コンクリートの剥離がみられたことから、亀裂部の調査及びコンクリートの強度試験を行った。調査の結果、補強が必要と診断され、内部への見学者の立ち入りを制限する必要性が生じたため、階段部分を取り外すこととなった。そのため現在は、展望施設としての役割を終えている。

写真 3-65 模擬天守

写真 3-66 階段が取り外された入り口

（５）今後の展望

模擬天守は、わが国のさきがけとして昭和４年(1929)に建造され、この種の施設としては近代化遺産の範疇に入っている。さらに、三熊山の山上に眺められる模擬天守は、洲本城及び洲本市のシンボルとして長く市民に親しまれているため、当面現状維持とする。今後は、安全性を考慮し、耐久年数を迎えた時点で撤去する予定であるが、市民及び学識経験者の意見を聴取しその取り扱いを検討するものとする。また、今後の城跡整備により、模擬天守の価値の位置付けが変化していくことも予想され、それらも踏まえて取り扱いを検討するものとする。